

宏智禪師頌古百則の研究（三）

佐藤悦成編

緒言

本稿は、宏智頌古百則の研究（三）となる。（一）（二）に続いて第五十一則より第八十則までを記載した。

本論考では、先の二回と同様に先学の成果を参考にしつつ、釈意を中心に置き、宏智正覚が伝えようとした教えに迫らんとする試みである。今回参加してくれたのは、佐藤

清道氏、伊藤秀真氏、大橋崇弘氏、西川慈恩氏、杉原修一氏を中心として、関美那子氏、有田大悟氏、富川拓哉氏である。

次回で第百則までの考察を目指すのが、参加諸氏の協力を得て充実した成果となることを期待している。

佐藤悦成

第五十一則 法眼缸陸

【本則】 擧。法眼問覺上座。缸來陸來。覺云。缸來。眼云。缸在甚麼處。覺云。缸在河裏。覺退後。眼却問傍鐔云。爾道。適來這僧。具眼不具眼。

宏智禪師頌古百則の研究（三）（佐藤）

〔訓読〕 挙す。法眼。覚上座に問う、舡来か陸来か。覚云く、舡来。眼云く、舡は甚麼の処にか在るや。覚云く、舡は河裏に在り。覚退いて後に 眼却りて傍僧に問うて云く、你道え。適來の這の僧 眼を具するや 眼を具せざるや。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。法眼文益が覚上座に問いました。船で来たのか歩いて来たのですか。覚は答えました、船で来ました。法眼は問いました、船は何処にありますか。覚は答えました、船は川にあります。覚が立ち去つて後に、法眼は更に傍の僧に問いました。君は言つてみなさい。さきほどの僧は、仏法に対する眼を備えているか、それとも眼を備えていないか、を。

〔釈意〕

法眼文益は地藏桂琛の法嗣で法眼宗の開祖である。法眼のことは『宏智頌古』第十七則「法眼毫釐」に出ている。法眼が君の修行はどうか、修行の境地はどうかとの問にたいして、船できた、その舟は川にありますと応じた。世間の生活を世法といい、これに對して、修道生活を佛法というのが一般の言い方ではあるが、世法と言われる生活が実は真の佛法であり、佛法を特別な存在と分別しては、却つて迷いの上塗りとなる。悟りとは人間生活に徹底し、真価を見出し真価を發揮して真価を働らせることである。佛法といつても、特に変わったものがあるわけでない。舟での到來は悟達をいい、そこを離れたのは、仏向上であり慈悲行の実践をいう。

〔頌〕 頌曰。水不洗水。金不博金。味毛色而得馬。靡絲絃而樂琴。結繩畫卦有這事。喪盡眞淳盤古心。

〔訓読〕 頌に曰く。水水を洗わず。金金に博えず。毛色を味まして馬を得。絲絃靡くして琴を樂しむ。繩を結び卦を画いて這の事あり。喪尽す眞淳盤古の心。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。水は水それ自身を洗うことはなく。金は金それ自身を取り引きしません。毛色にまどわされずに良馬を獲得しなくてはなりません。琴糸がなくては、琴をかなくてはいけません。繩を結んで文字とし、八卦を画いてこの治安の事があつたのに、過去の天子の純粹心をすっかり失ってしまいました。

【釈意】

法眼は、覚上座自身が仏であることを分っていないため、これに気が付くように法眼が指導するのである。水で水を洗うことができないように法眼と覚上座の境地は一体で、純金を純金と交換できないように、法眼と覚上座にはどちらにも異物が混入してない。名馬は乗らないと分らないし、引いてみないと分らないのである。琴が名器であるかは、弾いてはじめてわかるものである。文字以前の無分別の姿がそこにある。馬は外見では名馬であるかわからない。それぞれの本質をみぬかないと真の価値がでてこない。覚上座を組上に載せて、法眼は侍者の見識を試みている。

【語彙】

【法眼】法眼文益（885〜958）。法眼宗の開祖。【覚上座】楊州域東の光孝寺慧覚のことであろう。趙州從諗の法嗣。慧覚は機鋒俊利、弁舌捷疾であつたので、鉄嘴覚と称せられた。上座は僧の尊称。【毛色に味うして馬を得】名馬、伯樂になれば毛色のいかんによらずして馬の良否が明らかに分かるといふ。【繩を結び卦を画いて許の事有り】中国では上古には繩を結んで文字に代えて約束した。文字の成立しない以前のこと。【真淳】真実にして虚偽なく素直なこと。【盤古】中国における天地開闢の元祖の名である。

第五十二則 曹山法身

【本則】擧。曹山問德尚座。佛眞法身猶若虚空。應物現形如水中月。作麼生説箇應底道理。德云。如驢覷井。山

宏智禪師頌古百則の研究（三）（佐藤）

云。道即太殺道。只道得八成。徳云。和尚又如何。山云。如井覷驢。

〔訓読〕

挙す。曹山 徳上座に問う、仏の真法身は猶お虚空の若し。物に応じて形を現ずることは水中の月の如し。作麼生か箇の応ずる底の道理を説かん。徳云く、驢の井を覷るが如し。山云く、道うこと即ちはなはだ道う。只だ八成を道い得たり。徳云く、和尚又た如何。山云く、井の驢を覷るが如し。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。曹山本寂が徳上座に問いました。『金光明経』に、仏の真の法身はさまざまなく、あたかも天空のようであり、対象物に応じて形を現すことは水の中の月のようである、とあります。応ずる道理をどのように説かれますか。徳が答えました、驢馬が井戸を見ているようなものがあります。曹山が言いました、言い尽くしているようにみえるが、まだ八割を言い切っただけです。徳が聞きました、和尚ならばどのようにいいいますか。曹山は答えました、井戸が驢馬を見るようなものです。

〔釈意〕

曹山本寂は洞山良价の法嗣で、洞山の宗風が曹山によって大いに世に行われたので、曹洞宗と呼ばれるようになった。この一節は、『金光明経』の四天王品の中に出ているもので、この世界の存在すべてが仏そのものである、との意味である。そこから、本来の自己の活用は如何なるものか、との問答である。一体三宝である仏の真法身は虚空のようであるが、物に応じて形を現わすのは、あたかも水中の月だと『金光明経』ではいうのである。その様を徳上座は「驢馬が井戸を見るようだ」というので、曹山は徳上座を褒めながらその表現では八割だというのである。曹山は、と問われると、見るものと見られるものとを逆転させて、「井戸が驢馬を見るようだ」という。井戸の中の自分の影を見るのは片面のみで、自己の省悟ではあるが悟達ではなく、主体と客体が一体とならなければ、真の成就とはならないという。

【頌】 頌曰。驢覷井。井覷驢。智容無外。淨涵有餘。肘後誰分印。家中不蓄書。機絲不掛梭頭事。文彩縱橫意自殊。

【訓読】 頌に曰く。驢井を見、井驢を見る。智容れて外るるなく、清淨して余りあり。肘後誰が印を分かつた。家中書を蓄えず。機絲掛けず梭頭の事、文彩縱橫意自ら殊なり。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいたしました。驢馬が井戸を見、井戸が驢馬を見る。外に漏れることのない智慧を入れ、清淨にしてあふれんばかりにひたひたとuring おっています。肘の後には誰が護符の印を分かつたであろうか。家の中には書物を蓄えることにはないのです。機織り糸を掛けずに梭を動かしても、彩模様は縦横にあらわれて、ちゃんとすばらしいものとなります。

【釈意】

曹山と徳上座の語話は、共に真の自己が万物に応じており、彼らは無心にしていつも世界そのものとしてある。法の体得は自身で成就する以外に無く、師に教示してもらえるのは、其処に到る道筋のみである。言葉の法戦を行なつて、言葉の事実に気付くよう求道者を励ますのである。

【語彙】

【曹山】曹山本寂（840〜901）黄氏、泉州莆田県の人。洞山良价の法嗣。元証大師。【徳尚座】尚は上と同じ。曹山の伝中にある彊徳上座というのがその人か。【仏の真法身】『金光明經』四天王讚仏偈三四句。仏の真法身とは、一体三宝のことで法報応の三身に分けると、法身仏のことで毘盧遮那仏のことである。梵語であり、遍一切処と翻訳される。一切の対立がないから本當に清淨無垢であり、それで清淨法身毘盧遮那仏という。どこにあるのか、全宇宙が法身仏で、全宇宙とは自分のことである。凡夫の頭を描いた自我ではない、本當の自己のことである。【只八成を道い得たり】八成は十成に対する言葉。わずかに八分

だけあるということ。【驢の井を覷】驢馬は愚かな動物で井戸を見て、その水面に映っている自分の顔に何の思惟分別も起こさないこと。しかし能見と所見の对待がある。【井の驢を覷る】井戸が驢馬を見る時、井戸には情識はなし、無心無作である。すなわち能見も所見も对待の關係も成立しないことを表現する。【淨涵して余有り】淨は法身の妙用であり、一塵も余すところはなく万像を照らすという意。

第五十三則 黄檗 嚙糟

【本則】擧。黄檗示眾云。汝等諸人。尽是嚙酒糟漢。与麼行脚。何処有今日。還知大唐国裏無禪師麼。時有僧出云。只如諸方匡徒領眾又什麼生。檗云。不道無禪。只是無師。

【訓読】擧す。黄檗 眾に示して云く、汝等 諸人、尽く是 嚙酒糟の漢。与麼に行脚せば、何の処にか今日 有らんや。還つて大唐国裏に禪の師 無きことを知るや。時に僧 有り出でて云く、只諸方の徒を匡し眾を領するが如きは又 什麼生。檗云わく、禪 無しと道わず。只是 師無し。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。黄檗希運が修行僧に垂示して言いました。「君たち修行者は、絞り粕を食っているばかりだ。他人の後追いをして、自らの真義を会得しようとしていない鈍い者ばかりだ。こんな状態で修行を進めれば、いつまでも『今日』という日

【釈意】

現在でも酒粕は美味しいものだが、ここでいう絞り粕は、更なる出酒らしばかりを食べて美味しいところを逃している状況を指す。黄檗はそんな例えを使い、本物を知らないで他人の後追いをしても「真実の自己」を教える人は現れないと修行僧を煽っている。一般的に、修行僧は全国を行脚して教えを求めるものである

は来ないでしょう。ところで、大唐の国中に「禅の師」は居ないことを知っていますか」と。その時、一人の僧が進み出て言いました。「しかし、諸方には修行僧を指導する、多くの方々がいます。その方々は禅の師ではないのですか」と。黄檗は、「禅の教えが無いとは言っていないません。ただ、禅の師が居ないので」と答えました。

【頌】 頌曰。岐分絲染太勞勞。葉綴花聯敗祖曹。妙握司南造化柄。水雲器具在甄陶。屏割繁碎。剪除毳毛。星衡藻鑑。玉尺金刀。黄檗老察秋毫。坐斷春風不放高。

【訓読】 頌に曰く。岐分れて糸染んで太だ勞勞。葉を綴り花を連ねて祖曹を敗す。妙に司南造化の柄を握って、水雲の器具に甄陶在り。繁碎を屏割し、毳毛を剪除す。星衡藻鑑。玉尺金刀。黄檗老秋毫を察す。春風を坐断して高きを放さず。

【和訳】 天童覚和尚が頌にいたしました。糸が様々な色に染まりくたびれてしまいました。葉を染料にして染め重ね、花の染料を連ねて染めていくうちに元の糸の色はすっかり失われてしまいました。モノの性質を巧

為、この言葉に反発する修行僧が出ることを見越した黄檗の発言である。修行僧はこの黄檗の発言に対して「あなた自身も同じではないか」という意の言葉で反発する。禅の師とは禅を訓練させる人、見極めさせる指導者である。黄檗は改めて、無師独語は避けて師を求めなくてはならないとした。しかし、その禅の師と言える人間は黄檗自身以外に他に居ないと自らが言っているのである。自信に充ち溢れている。

【釈意】 禅の法脈は多く枝分かれをして、様々なものに染まり倦ね、本来の面目は喪失している。黄檗の教えは、正しい道具だけではなく意味をなさないのであり、その道具を使いこなす手腕があつてこそ、闊達自在な禅の本来の力が發揮できるのである、という。

み掌握する必要があります。例えば、雨雲から雨が降ってきた時に水を溜めるには専用の甕が必要になります。また、機織りの布は、織り傷の縫れや破片を取り除き、綿毛を切り揃えはじめて布になります。また、物差しは目印があつて初めて正確となります。よく切れる裁ち鋏で布を仕上げていきます。

黄檗の教えは、きわめて僅かなことも見抜き、ありのままの姿を見誤ることなく正しい道へ導くのです。

物事は目安が無いと定まらない。修行僧を正しい道に導いていく権限は全て黄檗にあるのだ。春風がさつと抜けるように、禪の教えに徹する、本来の自己に徹して分別をさせないのである。黄檗の教えは、「修行」に禪の真髄である真実の自己の姿を現すとしているのである。

【語彙】

【臨濟録】二則に同じ。【黄檗希運】(不詳)百丈懷海の法嗣。弟子に臨濟義玄。【攄酒糟漢】攄は喫する。酒糟は酒糟の意。酒粕を食べる奴。いたずらに他人の言説を追い、自らの真義を理解しない鈍漢を軽蔑した意味。【与麼】今、述べた状態や、実現している状態を指して、「このような」という意味。真実の顕現として現実にそのようにあるという意。【祖曹】曹はともがら。眾。祖先のこと。【司南造化の柄】万物を造化生育する権柄のこと。【水雲】雲水のこと。【器具】仏法を伝布する用を為すものであるから器という。【甄陶】陶器をつくる職人。優秀な人材を育てる。転じて、天地が万物をつくる。君主が人民を教えみちびく。【氎毛】(鳥などの)綿毛。【星衡藻鑑】衡は秤、星は秤の目を指す。藻は鏡の裏に鑄出している藻草の意味。秤には目がついており、鑄物のついた立派な鏡。秤の目のように正確。物事の分別の正確なこと。【玉尺金刀】玉尺は立派な物差し。金刀は立派な裁ち包丁。【秋毫】秋に抜け変わる獣の毛。きわめてわずかなこと。少し。いささか。

第五十四則 雲巖大悲

【本則】 舉。雲巖問道吾。大悲菩薩用許多手眼作麼。吾云。如人夜中背手模枕头。巖云。我會也。吾云。汝作麼生會。巖云。遍身是手眼。吾云。道即大殺道。即得八成。巖云。師兄作麼生。吾云。通身是手眼。

【訓読】 挙す。雲巖道吾に問う、大悲菩薩 許多の手眼を用いて作麼かせん。吾云く、人の夜間に背手して枕头を模するが如し。巖云く、我れ会せり。吾云く、汝作麼生か会す。巖云く、偏身 是れ手眼。吾云く、道うこと即ちはなはだしい。即ち八成を得たり。巖云く、師兄 作麼生。吾云く、通身 是れ手眼。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。雲巖曇辰が道吾円智に問います。「観世音菩薩は千手千眼を備えていると言いますが多くの手眼をどのように用いるのでしょうか」と。道吾は答えます。「夜間の暗闇で、手を背にまわして枕をさがすようなものだ」と。雲巖は、「わかりました」と答えました。道吾は「では、あなたは何がわかったのですか」と尋ねます。雲巖は言います。「偏身。この全身が手であり眼でもありません」と。道吾はそれに対して、「言う事はだいた

【釈意】

観世音菩薩に千手千眼があるが、それをいかに活用するかを問題にしている。それは、「夜間の暗闇で、枕をさがすようなものだ」とあるが、寝ているときに意識無く潜在的に寝やすいように外れた枕を探すようなもので、観音の慈悲心というものも意識する事無く自分の内側から溢れ出るものである。その観音菩薩の働きについて両者は「偏身」「通身」と答えている。「偏身」とは、偏は満遍なくの意味であるが表面的で手の働き、目の働きが迷える者を救うのである。「通身」は手や目の区別なく、そのもの全体が働くのだ。雲巖の言った「偏身」は生老病死など人間の手に

いわかったが、まだ八割の答えしか得ていません」と言います。雲巖は、「あなたならばどのような言いますか」と尋ねます。道吾は、「通身。この体中全体が残らず手であり、眼である」と答えました。

【頌】 頌曰。一竅虛通。八面樞樞。無象無私春入律。不留不礙月行空。清淨寶目功德臂。遍身何似通身是。現

前手眼頭全機。大用縱橫何諱忌。

【訓読】 頌に曰く。一竅虚通、八面樞樞。象無く私無く春律に入る。留せず礙せず月空に行く。清淨の宝目功德臂、

遍身は通身の是なるに何似れぞ。現前の手眼全機を頭わす。大用縦横何ぞ忌諱せん。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいたしました。穴を抜け出るように自由自在であり、玉のように透き通り四方八方に輝いています。形も、囚われも無く、春はやってきます。留まることも、さし障りもなく、月は東に上り西に沈みます。功德の臂それは、観世音菩薩の全てをあらわしています。遍身は通身とどう違いがあるのでしょうか、手と眼ですべてを表していますから、分別するものではありません。

抗えないものを自覚したうえで救いであるが、道吾の「通身」は、その抗えないものも救いなのだと言っているのである。

【釈意】

観音菩薩の働きは、自由自在であり、澄み渡り輝くのだ。大きな慈悲心の働きをどう避ける事ができようか。菩薩の全てを表しているのだ。あたかも変幻自在に人々を教え導くのである。それは、私たち個人が分別を離れて、真実の自己を得た時の働きである。言葉を変えて言えば、春は、形や型式は無いけれど、春の規律に従い自然に訪れるものである。また、月は誰からも止められない事もなく自由自在に変幻する。観音菩薩は闍達自在な真実の自己の姿である。

〔語彙〕

碧巖録八九則に同じ。【雲巖曇晟】(780～841) 葉山惟嚴の法嗣。弟子に洞山良价。【道吾円智】(769～835) 葉山惟嚴の嗣。雲巖と同門で子弟関係。【大悲菩薩】觀世音菩薩の別称。慈悲心は菩薩共通の特性であるが、とくに觀世音菩薩を大悲心の権化とする。【偏身是手眼】全身が手眼である。手眼と偏身とを二物見ない意。【通身是手眼】全身が手となり、全身が眼となること。主客の対立を忘れて、ものと一如になった境地。【竅虚通】一つの穴をさわりなく通りぬけること。自由自在な働きをいう。【樞樞】透明なさま。玉の透明明白なるさまにいう。【清淨寶目功德臂】『楞嚴經』六に「八万四千の清淨寶目、八万四千の婆陀羅臂、八万四千の燦迦羅首」とある。觀世音菩薩の心化無辺の妙用を説いたもの。

第五十五則 雪峰飯頭

〔本則〕

舉。雪峰在徳山作飯頭。一日飯遲。徳山托盃至法堂。峯云。這老漢。鐘未鳴鼓未響。托盃向甚麼處去。山便歸方丈。峯舉似巖頭。頭云。大小徳山。不會末後句。山問令侍者喚巖頭問。汝不肯老僧那。巖遂啓其意。山乃休去。至明日陞堂。果與尋常不同。巖撫掌笑云。且喜老漢會末後句。他後天下人不奈伊何。

〔訓読〕

挙す。雪峰 徳山に在つて飯頭と作る。一日 飯遅し。徳山鉢を托して法堂に至る。峰云く、這の老漢、鐘未だ鳴らず 鼓未だ響からざるに、鉢を托して甚麼の処に向つて去るや。山 便ち方丈に帰る。峰 巖頭に挙似す。頭云く、大小の徳山、末後の句を会せず。山 聞いて侍者をして巖頭を喚ばしめて問う。汝 老僧を肯わざるか。巖 遂に其の意を啓す。山 乃ち休し去る。明日に至つて陞堂、果して尋常と同じからず。巖 掌を撫して笑つて云く。且喜すらくは老漢末後の句を会す。他後 天下の人 伊を奈何ともせじ。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。雪峰義存は徳山宣鑑に参じ

〔釈意〕

雪峰と巖頭は徳山下の兄弟弟子である。師の徳山と兄弟弟子の巖頭

て、食事を司る係につきましました。ある日のこと、食事の用意が遅れていました。しかし、任持である徳山は食事の合図が鳴っていないにもかかわらず、応量器を携えて食事をする法堂に向かっています。雪峰は言います。「この老僧は、食事の合図の鐘はまだ鳴らず、太鼓も響かないのにどこに行くつもりですか」と。徳山はそれを聞き、方丈に戻っていきましました。

雪峰は、その話を巖頭に話しました。巖頭はいいません。「あの徳山老師も、まだ最後の一句を会得していないな」と。徳山は巖頭の言葉を聞き、侍者を使って巖頭を呼び出して「貴方は衲の仏法を認めていないのか」と質問しました。そこで、巖頭は耳打ちをして自分の真意を打ち明けます。すると、徳山はすぐに立ち去りました。

次の日になって、徳山は法堂にあがって説法をしました。巖頭はこれを見て、手を打って笑いながらした「よかったです。老師もやっと最後の一句がわかりました

は、雪峰がなかなか大悟を得ないため二人で尽力して雪峰を指導したのは有名であり、本則はその一幕である。禪林では規則正しい生活をおくることが一つの修行である。つまり、禪林において食事の時間が遅れると叢林全体の行事が遅れる事となる。雪峰はわざと遅らせることで自分の境地を徳山に現した。本来ならば激しい指導で有名な徳山であるが、雪峰の意図を解していたからこそ、あえて言葉を荒げる事なく自室に戻られた。徳山は師である体面にこだわることなく、黙って決められた役を徹すること、修行の形態をそのまま見せたのである。修行とは、自己を見抜くことであり、雪峰の方法は認められないという。雪峰の境地を認めたことにより、徳山は丈室へ戻ってゆくのである。そして、巖頭は徳山を批判することで雪峰に向かって「諦めるなよ」と激励するのである。徳山、巖頭は雪峰をなんとかしてやりたいと思つて芝居を打っている。法堂での説法は、雪峰や大衆を導こうとする徳山の気概とその気概を喜ぶ巖頭の姿がある。また、「最後の句」とは、この世界の全てが一句である。「百尺竿頭進一步」の意であり全体をもってひとつで解つてみればなんてことのないことを表している。

ね。これから以後は天下の人であっても師をどのようにするともできないでしょう」と。

【頌】 頌曰。末後句會也無。徳山父子太含胡。座中亦有江南客。莫向人前唱鷓鴣。

【訓読】 頌に曰く。末後の句會すや無しや。徳山父子太だ含胡す。座中亦江南の客有り。人前に向つて鷓鴣を唱うこと莫れ。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。最後の一言を会得したのでしようか。徳山と巖頭の父子は言葉を無くして通じ合いました。寄合いの中に江南が出身の客が居ます。その面前では鷓鴣という江南の鳥の曲を歌うべきではありません。

【釈意】

徳山と巖頭の師資は言葉無くして通じたが、それで誰もがわかる訳ではない。例えば、喜びの宴の中に江南の客が居るのに、江南（故郷）の曲を歌えば盛り上がっていた会に、たちまち哀愁がただようであろうから歌うべきではない。本則の終わり、徳山と巖頭は、最後の一言を会得したと喜んでゐる。しかし、この則で一番悟りを求めている雪峰は置き去りである。師と兄弟子の様子を見れば、余計に悟りを得たいという妄念に駆られるので大衆の前で喜ぶのは控えるべきである。徳山と巖頭の計らいは思い上がりに過ぎないと宏智は言っている。

【語彙】

【雪峰義存】(822～908) 青原下。徳山の法嗣。【徳山宣鑑】(780～865) 竜潭崇信の法嗣。【巖頭全豁】(828～887) 俗姓は柯氏、福建省南安県生まれ。青原行思の下で、仰山慧寂、徳山宣鑑に参じ、徳山の法を嗣ぐ。887年、賊に首を斬られて死す。諡は清儼大

師。【末後一句】向上絶対の一句。仏道極妙の境地を述べた活句。【含胡】言葉がはきはきせず、明瞭でないこと。心で言おうとしても、口に出して言う事ができない。【座中亦有江南客】郑谷の席上歌者に与うという詩。「花月楼台九衢に近し、清歌一曲金壺を倒す、座中有江南の客あり。春風に向かつて鷓鴣を唱えること莫れ。」という詩を転用したもの。鷓鴣とは江南にある『春』をあらわす鳥のこと。

第五十六則 密師白兔

【本則】擧。密師伯與洞山行次。見白兔子面前走過。密云。俊哉。山云。作麼生。密云。如白衣拜相。山云。老老大大作這箇語話。密云。爾又作麼生。山云。積代簪纓。暫時落薄。

【訓読】 挙す。密師伯 洞山と行く次で、白兔子の面前を走過するを見る。密云く、俊なる哉と。山云く、作麼生。密云く、白衣の相に拜せらるるが如し。山云く、老老大大にして這箇の語話を作す。密云く、爾又作麼生。山云く、積代の簪纓、暫時落薄す。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。神山僧密が洞山良价と行脚していた時、白兔が目の前を走り去るのを見ました。僧密が「素早いな」と言いました。洞山は「どのようにでしようか」と言いました。「平民から宰相に任命されるようなものです」と僧密が言いまし

〔釈意〕

僧密は「俊」という言葉に動きの素早さのみでなく、利発さや聡明さの意味を持たせている。また、白衣は平民を表すことから素早い白兔を、才氣あふれる平民が官位を駆け上がって出世する様子に重ね合わせたのである。対する洞山は兄弟子を敬いつつも嗜めていようである。代々宰相を務めるような名門の家柄でも没

た。洞山が「いい年をして、まだこんなことを言っています」と言いました。僧密は「あなたならどうですか」と言いました。洞山は「代々続いた名家の家柄も、時には落ちぶれます」と言いました。

〔頌〕 頌曰。抗力霜雪平歩雲霄。下惠出國相如過橋。蕭曹謀略能成漢。巢許身心欲避堯。寵辱若驚深自信。眞情

參跡混漁樵。

〔訓読〕 頌に曰く。力は霜雪に抗し歩を雲霄に平す。下惠は国を出て相如は橋を過ぐ。蕭曹の謀略能く漢を成す。巢許の身心堯を退けんと欲す。寵辱には若も驚く深く自ら信ぜよ。眞情跡を参じて漁樵に混ず。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいたしました。雪の重みに木の枝が耐えるように力強く、その歩みは雲の上を行くようです。柳下惠は国を出て、司馬相如は橋を通り過ぎました。蕭何と曹参といった宰相の知略で漢の国が成立し、巢父と許由は堯からの禅譲の申し出を断つて隠遁しようとしてました。寵愛や侮辱には心が動か

落することがあるように、この世には不変の事象は存在しない。これは悟道の人にも当てはまることである。悟りの境地にとどまり続けることを良しとせず、現実の世界で生きて行かなければならない。僧密の言葉には悟りを求める向上の姿勢が含まれており、これを踏まえてみれば、僧密の言葉に悟りへの向上の相を、洞山の言葉に向下の相を見て取ることができる。

〔釈意〕

向下門の心境を表した洞山を大地にあつて雪の重みに負けない樹木に例え、向上門の僧密は雲の上で歩を進めているようだ。宏智は説く。そして世に出た英傑と権力から離れた知識人との比較が続いている。柳下惠は自分の才能を活かせる場へは拘りを持たず、何処へでも仕官した人物である。司馬相如は出世するまでは故郷の橋を渡らないという誓いを立て、後に高官となつてその橋を

されるものです。己を強く信じなさい。漁師や木樵と交流した時に真の自己が痕跡を顕すのです。

通った。蕭何と曹參は漢の劉邦を補佐して国を安定させ、巢父と許由は堯帝からの帝位の誘いを断って山奥に隠れたという。柳下惠・巢父・許由は目的・悟りに向かい、そこにとどまって発揮される力を暗示している。一方の司馬相如・蕭何・曹參は彼岸から離れ此岸へと帰還する境地をあらわしたものである。俊敏な白兔のように出世していく人物は悟りを目指す修行者の姿であり、あるべき姿である。しかし宏智は野に下って俗世にまみれた時に、その人の本当の素質があらわれるといい、洞山の境地をより高く評価している。

〔語彙〕

【密師伯】神山僧密(生没年不詳)。雲巖曇晟の法嗣。洞山とともに各地を巡った。【洞山】洞山良价(807〜869)。雲巖曇晟の法嗣。【白衣】白衣拜相。無位無官の在野の平民が一躍宰相として拜されることから、全てを転じて聖となすこと。転凡入聖の意。【簪纓】簪は冠が落ちないように髻に通して止める冠の付属品。纓は冠の頸紐。ここでは高位の身分を指す。【雲霄】雲と空。【下恵】柳下恵。周代魯の国の人。どんなつまらぬ官職でも推薦されて仕える以上は、ひたすら才智を傾けて働き、常に自分の信じる道を行った。また君主に見捨てられても怨みもせず、どんなに困っても少しもそれを苦にしなかった。【論語】衛霊公第十五からの引用。【相如】司馬相如(前179〜前117)。前漢の文人。【漢書】司馬相如伝第二十七上からの出典。【蕭曹】蕭何(？〜前193)と曹參(？〜前190)ともに前漢の政治家。劉邦を補佐して宰相となり国家繁栄の礎を築いた。【巢許】巢父と許由。古代中国の三皇五帝時代の伝説的人物。皇帝からの讓位の申し出を汚らわしいとして川で耳を洗った許由と、それを見て牛に水を飲ませると止めた巢父の故事から。【漁樵】漁夫と木樵。世俗的世界の喩え。

第五十七則 嚴陽一物

【本則】 舉。嚴陽尊者問趙州。一物不將來時如何。州云。放下著。嚴云。一物不將來。放下箇甚麼。州云。恁麼則擔取去。

【訓読】 挙す。嚴陽尊者 趙州に問う。一物不將來の時如何。州云く、放下著。嚴云く、一物不將來。箇の甚麼をか放下せん。州云く、恁麼ならば則ち担取し去れ。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。嚴陽尊者が趙州從諗に尋ねました。「一切何も持たないとはどのようなものでしょうか」と。趙州は「捨ててしまいなさい」と言いました。嚴陽は「何も持っていないのに、何を捨てるのですか」と言いました。趙州は「それならば担いで行きなさい」と言いました。

【釈意】

一物不將來とは迷いもなく、教理や悟りというものさえきれいに忘れた状態である。嚴陽はこの境地に達したことを師の趙州に報告した。しかし趙州からみれば一物不將來という悟りの世界では、有無という価値判断は問題にすらならないのである。趙州はそうした有無という慢心が嚴陽の心に残っていると見抜き、それを捨てるように言ったのである。そのことに気がつかないなら悟りへの執着心を担いで行けと言っている。

【頌】 頌曰。不防細行輸先手。自覺心龜媿撞頭。局破腰間斧柯爛。洗清凡骨共仙游。

【訓読】 頌に曰く。細行を防がずして先手に輸く。自ずから心の龜なるを覺り撞頭を媿ず。局破れ腰間の斧柯爛る。凡骨

を洗清して仙と共に遊ぶ。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいたしました。注意深く囲碁を打たないので、先手を取られて対局に負けてしまいません。自ずと軽率な一手によって指し手を封じられた事を恥じるでしょう。終局した時に腰につけた斧の柄が腐っているのに気づきます。世俗の骨を洗い清めて仙人と遊んでいるかのようにです。

〔釈意〕

趙州と嚴陽のやりとりを囲碁の対局に宏智は例えている。嚴陽は軽はずみな問いかけをしたばかりに、趙州に「放下著」の先手を打たれた。趙州の導きは大悟徹底していなかった嚴陽に自分の未熟さを気づかせるには十分であった。対局を見物し終えた王質という木樵の腰につけた斧が腐り落ちたように、嚴陽の中にあつた悟りへの執着心も消えると宏智は考えている。悟りとは迷悟凡聖といった一切の汚れを洗い清めてはじめて得られる境地である。

〔語彙〕

【嚴陽尊者】善信（生没年不詳）。趙州從諗の法嗣。嚴陽山（武寧県）に新興院を建立して住したため、嚴陽尊者と呼ばれる。【一物】ものの本体、中核。「そのもの」と具体的に指して真如の理を表現する場合に用いる。【放下著】下に置けの意。著は命令の助詞。【担取】我が身に担うこと。【細行】細かな行い、ささいな行為。ここでは囲碁の緻密な戦略のこと。【麤】粗い事。【撞頭】囲碁において相手の打ち手を真つ向から抑止する手をいう。転じて師家が学人の迷惑を止めてしまう作略を指す。【媿】恥じること。【局破腰間斧柯爛】中国の伝説を集めた『述異記』からの引用。晋の時代、木樵の王質が山に入ると童子たちが碁を打っていた。碁を眺めていた王質は童子から棗を貰い、飢えを感じることはなかった。しばらくして童子から言われて斧を見るとその柄が朽ちていることに気付いた。王質が村に帰ると知っている人は誰一人いなくなっていたという故事から。

第五十八則 剛經輕賤

【本則】 舉。金剛經云。若為人輕賤。是人先世罪業應墮惡道。以今世人輕賤故。先世罪業則為消滅。

【訓読】 挙す。金剛經に云く、若し人の為に輕賤せらるれば、是の人先世の罪業にて應に惡道に墮すべきに、今世の人に輕賤せらるるを以ての故に先世の罪業則ち為に消滅す。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい『金剛經』にこう言います。

「もし人々に輕蔑されるならば、それはその人が前世でなした罪業によって苦境に立たされているのです。そして、現世で輕蔑されているということによって、前世での罪は消滅するのです」と。

【釈意】

この公案は禪宗において重要視される。これを通過した者は經典に捉われずに經を活用し、因果に縛られずに因果を自由に使いこなすのである。本則では、罪の因果を主題としており、現世での困難をも煩惱を断じ尽くして悟りに入る為の手段としてとらえる禪の宗風がみてとれる。

【頌】 頌曰。綴綴功過。膠膠因果。鏡外狂奔演若多。杖頭擊著破龜墮。龜墮破 來相賀。却道。從前辜負我。

【訓読】 頌に曰く。綴綴たる功過、膠膠たる因果。鏡外に狂奔す 演若多。杖頭に擊著す破龜墮。龜墮破し 来りて相賀せば、却て道う、從前 我に辜負すと。

〔和訳〕

天童覚和尚が頰にいいました。功德と罪過はつながつているものです。原因と結果は固く結びついています。演若達多は鏡に自分の顔が映らないといって探しまわり、破竈墮和尚は杖で竈を叩きました。竈を叩き壊すと、竈の神が出てきて礼を述べました。「今までは自分自身に背いていました」と。

〔釈意〕

因果や善悪は表裏一体であり、連関するものである。そのため、この事実を見誤れば、鏡が倒れていた事に気づかず、頭に頭がなくなつたと勘違いした演若達多のように、迷いの世界に墮ちてしまう。人間が鏡の前に居てはじめて姿が映るのであり、鏡の外には映らないのである。宏智はこのように因果関係を誤認した例を挙げ、さらに別の例を続けている。破竈墮和尚に叩き壊された竈の神は、土でできた竈という本分を越えて人間を祟るようになった。和尚は竈の神の迷妄を壊して本来の自己を出現させて悪業から解き放つた。これら二つの例えに共通するのは、本来の自己を見失つて悪業報に墮ちた者の姿である。功罪・因果が一体であるから、因果を正しく認めていれば本来の自己を見失うことは無いのである。

〔語彙〕

【金剛經】『金剛般若波羅蜜多經』羅什訳。禪宗では五祖弘忍から用い始め六祖慧能より後は南宗で重用された。般若不可得の理を説く。【綴綴】つづること。連絡していること。【膠膠】膠でくっつけたようにびたりと合致する様。【演若多】演若達多。毎朝鏡を見て喜んでいた美男子であったが、ある日、鏡に自分の顔が映らなかつたので驚きのあまり狂人になつたという。【楞嚴經】卷四より。【破竈墮】破竈墮和尚（生没年不詳）。唐代北宗の禪僧。禪法に通じていたが、言動は常軌を逸していたという。生け贄を捧げないと祟る竈に向かって説法し、これによって悪業報から解放された竈神が礼を言った。和尚は本来の性質を悟らせただけだと言つた故事による。【景德傳燈録】卷四より。【辜負】そむくこと。

第五十九則 青林死蛇

【本則】 擧。僧問青林。学人径往時如何。林云。死蛇当大路。劬子。莫當頭。僧云。當頭時如何。林云。喪子命

根。僧云。不當頭時如何。林云。亦無回避處。僧云。正當恁麼時如何。林云。却失也。僧云。未審向甚麼

処去也。林云。草深無覓處。僧云。和尚也須隄防始得。林撫掌云。一等是箇毒氣。

【訓読】 挙す。僧 青林に問う、学人 徑に往く時如何。林云く、死蛇大路に当たる。子に劬む、当頭すること莫れ。僧云

く、当頭の時如何。林云く、子 命根を喪う。僧云く、当頭せざる時如何と。林云く、亦回避する處無し。僧云

く、正當恁麼時 如何。林云く、却つて失なり。僧云く、未審し 甚麼の処に向つて去るやと。林云く、草深くし

て覓る處無し。僧云く、和尚 也た須らく隄防して始めて得るべし。林 掌を拊して云く、一等是箇の毒氣。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。修行僧が青林師虔に問いました。「修行者が徑を歩む時はどのようなものですか」と。青林は「死んだ蛇が大路にて出会うものです。あなたに向つてくるので出会わないようにしなさい」と答えました。僧は「出会う時はどのようなものですか」と聞きました。青林は「命根を失います」と言いました。僧はまた「では、出会わない時

【釈意】

ある僧は修行とはどのようなものと「徑」であらわして聞くのである。青林は大路に死んだ蛇がいると言う。大路は悟りへの道を指し、死蛇とは煩惱、または修行中に起こる心の動きのことを指している。悟りの境地を得るために修行を行すが、そこまでに辿り着くには様々な煩惱や心の動きを乗り越えなくてはならない。それを青林は「当頭すること莫れ」といつている。僧は煩惱に惑わされた時はどうしたらいいかを聞くのである。青林は煩惱

はどうですか」と言いました。青林は「回避するとは出来ないでしょう」と答えました。再び僧は「ではまさに今この時はどうでしょうか」と聞くのです。

青林は「それでも失うでしょう」と答えました。僧は「では一体どうやったら死蛇から逃れられるのですか」と聞きます。青林は「草が深いと求める事が出来ないのです」と。僧は「和尚、堤防をして始めて得るのですね」と言いました。すると青林は掌を拊して言いました。「二等是箇の毒氣」と。

に惑わされてしまつては悟りへの境地に到ることはない。「命根を喪す」で言うのである。

次に僧は煩惱に出会わない時はどうすればいいのかを聞くのである。青林は煩惱が無い人などいないと言うのである。誰にでも心の動きは有り、それによつて様々な欲が起きるのである。「回避する処無し」とはそのことである。

僧は今の自分は悟ることができのかを青林に聞くのである。青林は今の僧では悟りへの境地に辿り着くことはできないと言う。

そんな答えに対して僧は一体どうすればいいのかを「未審し、甚麼の処に向つて去るや」と聞くのである。青林は生い茂っている草の中では悟りの境地を求めることは出来ないというのである。それを聞いた僧は修行中に起こる様々な心の動きを遮ることで始めて悟りへの境地が見えてくるのだと気付く。最後に青林は掌をさすつて誰にでも迷いや悩みといった心の動きがあることを示し、また誰でもそれぞれの自己が備わつており、悟りの境地を得ることが出来ることを示したのである。

【頌】 頌曰。三老暗轉柁。孤舟夜回頭。蘆花兩岸雪。煙水一江秋。風力扶帆行不棹。笛聲喚月下滄州。

【訓読】 頌に曰く。三老暗くして柁を転じ、孤舟夜にて頭を回る。蘆花兩岸に雪。煙水一江の秋。風力帆を扶け、行き

棹さず。笛声月を喚んで滄州に下す。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にして言いました。三老は暗いところでも柂を転じ、夜であつても、確実に舟を導きまゝす。兩岸には蘆の花が雪のように咲いています。煙水が一江にたなびいて秋のまつただ中です。風が吹けば帆をはり、棹を使わなくても船は進みます。笛を吹いて月を呼び、月は水辺に沈みます。

〔釈意〕

三老は舵取りのことである。頌では青林を三老にたとえ、僧を孤舟でたとえたのである。「柂を転じ」と「頭を廻らす」は、舵取りである青林が修行についての道を僧に示したことを意味する。行き先を見失っている僧に対して青林は、一つ一つ僧の質問に答えて、道を示すのである。それはあたかも兩岸に白いアシの花が道のように咲いているようである。

風が吹けば帆を揚げて、棹を使わずとも舟は進むのである。本則でいうと青林が修行に迷いがある僧を導いているところを、頌では「風力帆を扶け、行きて棹さず」で表している。

〔語彙〕

【青林】青林師虔（？〜904）姓は陳氏。杭州（浙江省）の人で、洞山良价に得法する。【當頭】真つ向から、その時、出会い頭に。また目の前に、直接せまる。【命根】寿命、生命そのものの意。【正恁麼時】まさにその時ということ。【堤防】河川の氾濫や海水の浸入などを防ぐもの。【一等】差別の心がなくの意。無別・無異と同義。【三老】舵取りのこと。【蘆花】アシの花穂のこと。【滄州】青々として水に囲まれた州浜のこと。人里離れた水辺。また仙人や隠者の住んでいる所とも。

第六十則 鐵磨牯牛

【本則】 擧。劉鐵磨到瀉山。山云。老牯牛汝來也。磨云。來日臺山大會齊。和尚還去麼。山放身臥。磨便出去。

【訓読】 挙す。劉鐵磨瀉山に至る。山云く、老牯牛汝來たれるや。磨云く、來日台山にて大會齊。和尚還つて去かん

や。山身を放ちて臥す。磨便ち出で去る。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。劉鐵磨という尼僧が瀉山のところへやって来ました。瀉山靈祐は「老牯牛よ、あなたは何しに來たのですか」と聞きました。劉鐵磨は「明日、台山で法要が行われます。瀉山和尚も行きませんか」と聞くのです。そうすると瀉山は身体を自由気ままに横たえて寝たのです。鐵磨は立ち去ったのです。

〔釈意〕

劉鐵磨という尼僧が瀉山のところへ來た話である。瀉山は劉鐵磨のことを老牯牛と呼び始める。老牯牛とは修行の円熟した修行僧のことを指し、また鐵磨は機鋒峭峻と言われており、瀉山は劉鐵磨の並々ならない氣配を感じ取ってこう呼んだのである。瀉山がなぜここに來たのかと聞かれた鐵磨は、後日行われる法要に行かないかという誘いであつた。鐵磨はこの時すでに、瀉山がどう答えるかを試していると思われる。しかし、瀉山はただ身体を横にして寝ただけであつた。瀉山は大会齊に行くか行かないかという選択肢があるなかで、なぜ横になつたかというところ、それは思慮分別をしないことを意味している。鐵磨の質問に対して答えずに、身体で行動することで思慮分別を越え、また自己のありよう

を示したのである。鉄磨は修行を順調に進めている瀉山を見て、その場から立ち去ったのである。

【頌】 頌曰。百戦成功老太平。優柔誰肯苦争衡。玉鞭金馬閑終日。明月清風富一生。

【訓読】 頌に曰く。百戦功成りて太平に老う。優柔誰か肯えて苦に衡を争わん。玉鞭金馬 閑に日を終わる。明月清風 一生を富む。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいたしました。百戦を制して平和の世になって年月が経ちます。あえて柔軟に対応して無駄に争わないのです。美しい鞭と名馬は静かに一日を終えるのです。綺麗な月に清らかな風が心を豊かにさせるのです。

【釈意】

本則では鉄磨が瀉山のもとへやって来るのである。頌で「百戦功成りて太平に老う」は鉄磨のこと。鉄磨は機鋒峭峻とまで言われており、それはまさに数々の問答をこなしてきたようである。そんな鉄磨の勢いある問答に対して落ち着いた対応したのは瀉山であった。それを「優柔誰か肯えて苦に衡を争わん」で表している。その様は瀉山と鉄磨の二人ならではの高度な問答であることを「玉鞭金馬」の句で言っているのである。その様子は誰が見てもあきらかである。

【語彙】

【劉鉄磨】（詳細不詳）、唐代の人。劉氏の女で、機鋒峭峻によって劉鉄磨と呼ばれるようになる。瀉山靈祐に参じ、その法を受け継いだ。【機鋒峭峻】機鋒は矛先や鋭い勢いの意味。また禅僧が他の僧侶に対して示す鋭い態度のこと。峭峻は山などの高く険しいこと。機鋒が人を寄せ付けないほどに鋭いことの意味。【瀉山靈祐】（771〜853）姓は趙氏。百丈懐海に参じ、その法を

受け継いだ。滄仰宗の祖。【老特牛】老いばれ牛のこと。転じて修行の円熟した人を指す。また滄山の水牯牛の対として用いた。【台山】五台山のこと。太原府代州五台县にあり、略して台山と呼ばれるようになる。【大会齊】大供養のことで、大勢の僧侶で供養を行う法要。どんな人にも平等に供養すること。【明月】清白に澄んだ月のこと。明白なものにたとえる。

第六十一則 乾峰一畫

【本則】舉。僧問乾峰。十方薄伽梵。一路涅槃門。未審路頭在甚麼處。峰以拄杖一畫云。在這裏。僧舉問雲門。門云。扇子勃跳上三十三天。築著帝釋鼻孔。東海鯉魚打一棒。雨似盆傾。會麼會麼。

【訓読】 挙す。僧 乾峰に問う、十方薄伽梵、一路涅槃門。未審路頭其麼の處に在るや。峰拄杖を以て一画して云く、這裏に在り。僧 挙して雲門に問う。門云く、扇子勃跳して三十三天に上り、帝釈の鼻孔に築箸す。東海の鯉魚打つこと一棒すれば、雨盆を傾くごとし。会すや、会すや。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。ある僧が越州乾峰に問いました。「十方薄伽梵、一路涅槃門の世界とは一体どこにあるのですか」と。越州乾峰は拄杖を用いて一の字を画いて言いました。「ここに在りますよ」と。僧は同じ質問を雲門文偃の所へ聞きに行きました。雲門は「扇子が三十三天まで飛んで、

【釈意】

修行僧が乾峰に、「十方薄伽梵 一路涅槃門、未審路頭其麼の處に在るや」と聞くのである。十方薄伽梵 一路涅槃門とは諸仏の涅槃に入る道などの意味であるが、ここでは仏の世界、または眞実の世界とはどのようなものを聞くのである。乾峰は僧の質問に對して、拄杖を持ってただ線を一つ書き、ここにあると答えた。乾峰は今私とあなたが生きているこの現実の世界こそが眞実であ

帝釈天の鼻に当たつてしまふでしょう。東海にいる大魚を棒で一振りすれば、それはお盆の中にある水が傾いてこぼれてしまいます。わかりますか、わかりますか」といいました。

ることを言つたのである。

次に僧は雲門文偃の元へ行き、同じ質問をする。雲門の答えは扇子が飛んで行き、帝釈天の鼻に着くと言うのである。修行僧は真実の世界というものを人に聞いてしまつてゐる。そんな修行僧に雲門は扇子が飛び、帝釈天の鼻に着くというあり得ない話をもつて、答えるのである。雲門は修行僧に、真実の答えを難しい言葉で例えて聞いても、それは意味がない事を修行僧に伝えようとしたのである。

さらに雲門は乾峰が行つた一面を使つた説法はまるでお盆の中にある水が傾いてこぼれるぐらいわかりやすいことを「東海の鯉魚打つこと一棒すれば、雨盆を傾くごとし」で言つていたのである。そして最後に乾峰がわかりやすい説法をしてくれていた事が理解できずかと言うのである。

【頌】 頌曰。入手還將死馬醫。返魂香欲起君危。一期拶出通身汗。方信農家不借眉。

〔訓読〕 頌に曰く。入手し還つて死馬を將に医す。返魂香 君が危うきを起さんと欲す。一期拶出す通身の汗。方に農家

眉を惜しまざるを信ずべし。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいました。治療することで病の馬を治すのです。返魂香を焚くのは、あなたを危ないことから遠ざけるのです。一振りの衝撃で全身の汗をも引いてしまいます。師は弟子を導くのに、怖れることはないことを信じるべきです。

〔釈意〕

一句目では修行僧に対する乾峰の説法を言っている。誤った見識の修行僧に対して、乾峰は一面を画いただけであったが、それは優れた説法であった。まるで死にかけている馬を、生き返らせるようなことだと言っている。二句目は雲門の修行僧に対する説法を表している。雲門の説法も乾峰と同様に、修行僧を誤った方向に向かわせないように示している。一句目も二句目もどちらとも死んだものを生きかえさせる意味があり、乾峰と雲門が修行僧を正しい方向へ向かわせるところを表している。また、「一期拶出す通身の汗」とは、本則でいう乾峰が行なった説法をあらわし、汗が引くほどわかりやすいものであったことをいう。師は弟子を導くのに、仏罰を怖れることはない。このことを「眉を惜しまざること」を「と言っている」。

〔語彙〕

【乾峰】越州乾峰（詳細不詳）洞山良介の法嗣。越州に住した。【十方薄伽梵一路涅槃門】薄伽梵は世尊の義。十方世界の諸仏が等しく涅槃に入る同じ一つの道のこと。【雲門】雲門文偃（864～949）のこと。雲門宗の人。【三十三天】四王・忉利・夜摩・兜率・化樂・他化自在の欲界六天。須弥山の頂上にある。帝釈天を中央に、四方に八天が存在し、合わせて三十三天となる。【築簀】打ちあたること。【東海鯉魚】大海における大魚。転じて大量のある禅僧にたとえる。【一棒】棒は杖のこと。師家が学人を接待するために用いる法具のこと。【盆】洗面器のこと。また米を入れる器。【入手】手に入れること。転じて悟ること。また求める物が手に入り、自分のものとなるようにすること。【返魂香】香料の名。焚けば死んだ人の靈魂を呼び戻す

という。また、起死回生の師家の妙手段にもたとえる。【一期】人生の一生涯のこと。【通身】全身のこと。【拶出】ショックを与えること。衝撃的な発言をすること。【儂家】儂にはわれ・わしなどの自分、またきみ・あなた・かれなどの相手などを指す。一般的にわたしの意味。

第六十二則 米胡悟不

【本則】擧。米胡令僧問仰山。今時人還假悟否。山云。悟即不無。爭奈落第二頭何。僧廻擧似米胡。胡深肯之。【訓読】挙す。米胡僧をして仰山に問わしむ。今時の人、還つて悟りを仮るや否や。山云く、悟りは即ち無きにあらず。第二頭に落ること争奈何せん。僧廻つて米胡に挙似す。胡深く之を肯う。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。米胡が僧をつかひに出して、仰山慧寂に質問をさせました。「今時の人も、また、悟ることがあるのでしょうか」。仰山「悟りがないわけではありません。しかし、第二頭に落ちていますはいけません」。僧は、この答えを米胡に伝えました。米胡は、仰山のこの答えを、深く受け止めました。

〔釈意〕

悟りが何であるか分かっていても、悟りと迷いを区別して理解をすれば、悟りにいたることはない。悟りを求めるための修行では、それ自体が煩惱となるので、そこから離れなくてはならない。現実世界を迷いと観て、仏の世界を清浄と観ることは分別である。それを第二頭といった。

【頌】 頌曰。第二頭分悟破迷。快須撒手捨筌罟。智也難知覺噬臍。兔老冰盤秋露泣。鳥寒玉樹

曉風淒。持來大仰辨眞假。痕玷全無貴白珪。

【訓読】 頌に曰く。第二頭 悟を分つて迷を破る。快に須らく手を撒して筌罟を捨つべし。功未だ尽きず 駢拇と成る。智

や也た知り難く噬臍を覚ゆ。兔老いて冰盤秋露に泣く。鳥寒うして玉樹曉風淒じ、持し来つて大仰眞假を弁ず。

痕玷全く無うして白珪を貴ぶ。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいたしました。第二頭によつて悟証がわかり、迷いの世界を抜け出ます。はやく迷いを抜けて、方便から離れるべきです。修行の功によつて悟り、悟ったことから離れられなくなつては、身も蓋もありません。智慧をもつて知ろうとしても、臍を噬むことができないのと同じで、後悔だけが残ります。満月の夜光の下、秋の草が露を含んで、涙をこぼすかのように流れます。鳥が、冷えきつた樹に巢をつくり、曉風に耐えています。米胡のもとに僧が言葉をもつてきて、仰山に仏法があるかどうか確認をしました。玉に瑕の痕はなく、白珪のように美しい玉でした。

【釈意】

たとえ、方便をつかつて煩惱を離れることができても、そこに捉われていては、眞の悟りを得ることはできない。修行で煩惱が何であるかつかめたのなら、そこにとどまってはならない。仰山は、仏性が何であるか知っているので、（瑕のない玉が自由にころがるように）修行者を導いている。

〔語彙〕

【米胡】生没年不詳。滄山靈祐の法嗣。京兆米和尚・七師・米七師とも。【仰山】仰山慧寂（807～883）のこと。韶州（広東省懷化県の人。滄山靈祐の法嗣。【第二頭】向上の第一義ではない。後手。【拳似】話柄を提示すること。「拳向」と同じ。【撒手】打ち払うこと。【釜罌】目的を達成するための方便。【駢拇】足の親指と人差し指が連なるさま。【噬臍】後悔。【兔老】月中に兔がいる（兔のかたちに見える）ことから、円月。【冰盤】月の異名。【玉樹】霜雪を帯びた樹。

第六十三則 趙州問死

【本則】擧。趙州問投子。大死底人却活時如何。投云。不許夜行。投明須到。

〔訓読〕 挙す。趙州 投子に問う、大死底の人 却つて活する時如何。投云く、夜行を許さず。明に投じて須らく到るべし。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。趙州從諗が投子大同に質問をしました。煩惱がなくなつた人は、どのような時にどのようなはたらきを表すのでしょうか。投子がいいます。「夜の外出を禁止します。昼間に出発して、明るいうちに到着すべきです」と。

〔釈意〕

大死底の人とは、煩惱を捨てきつた人のことを指す。迷いを離れた人は、文字言句を超越している。そのことを、夜に出歩くことをせず、正々堂々と大道を行くというのである。

【頌】 頌曰。芥城劫石妙窮初。活眼環中照廓虛。不許夜行投曉到。家音未肯付鴻魚。

【訓誦】 頌に曰く。芥城劫石妙に窮むる初め、活眼環中廓虚を照らす。夜行を許さず曉に投じて到る。家音未だ肯えて鴻魚に付せず。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいたしました。この世界のはじまりを極め、活眼の中に虚空を観ています。夜の外出は許されず、明るくなって出発して到着しなくてはなりません。故郷へ送る手紙を、まだ送り出していない。

【釈意】

煩惱を離れることとは、時間や空間の概念を離れることであり、文字言句からも離れることである。そのことを会得し、仏の眼で真実を見抜くことができたなら、それは、からりとした空の境地に至る。言葉によって、この真理を表すことはできない。師資に伝わる仏法は、教外別伝として相伝しているのである。

【語彙】

【趙州】趙州從諗(778〜897)のこと。南泉普願の法嗣。山東省曹州郝郷の人。趙州観音院(河北省)に四〇年間住した。【投子】投子大同(819〜914)のこと。翠微無学の法嗣。舒州(安徽省)の人。【芥城劫石】長時間。【環中】空虚なところ。【家音】故郷へ送る音信。【鴻魚】家音と同じ。

第六十四則 子昭承嗣

【本則】 擧。子昭首座問法眼。和尚開堂。承嗣何人。眼云地藏。太宰負長慶先師。眼云。某甲不會長慶一轉語。昭云何不問。眼云。萬象之中獨露身。意作麼生。昭乃竖起拂子。眼云。此是長慶處學得底。首座分上作麼生。昭無語。眼云。只如萬象之中獨露身。是撥萬象不撥萬象。昭云不撥。眼云兩箇。參隨左右皆云。撥萬象。眼云。萬象之中獨露身。

〔訓読〕

挙す。子昭首座 法眼に問う、和尚開堂して何人に承嗣す 眼云く、地藏。太だ長慶先師に辜負す。眼云く、某甲長慶の一転語を会せず。昭云く、何ぞ問はざる。眼云く、万象之中独露身 意作麼生。昭乃ち弘子を竖起す。眼云く、此は是れ長慶学得する処の底なり。首座分上は作麼生。昭 語無し。眼云く、只だ万象之中独露身が如きは是れ万象を撥うか万象撥はざるか。昭云く、撥はず。眼云く、両箇 參隨の左右皆云く、万象を撥う。眼云く、万象之中独露身 響。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。子昭首座が法眼文益に尋ねました。「和尚は開堂されましたが、誰の法を嗣がれたのですか」。すると法眼が言いました。「地藏桂琛です」と。子昭が「それでは長慶和尚に背くことになりませんか」と言いました。法眼が言いました。「衲は長慶和尚が境地を表した一言が理解できなかったのです」と。子昭が言いました。「どうして私に尋ねないのでですか」と。法眼が言いました。「この世のすべての存在に仏性が顕われているとはどのような意味でしょうか」と。すると子昭は弘子を立てました。法眼は「それは長慶の会得した境地です。あなたの心境はどのようなものですか」と言

〔釈意〕

長慶のもとで長年参じた法眼に対して、義理を欠くのではないかと子昭が詰問したことから問答が展開する。最初は禅宗で重視される面授・嗣法の重要性が問題となっているが、次第に主題は仏性のありかたへと移り変わって行くのである。法眼は誰の法を嗣ぐのかということに拘っていることから、修行が十分でないことを見切っている。そこで、長慶が「仏性・悟りは万物の中にあられてゐる」と示した句を題材して法眼は子昭を導く手段とした。はじめ子昭は弘子を立てて言葉離れた行動で答えたが、それは長慶の物真似であったことが見抜かれてしまった。言葉に窮した子昭を見かねて、法眼は「万物」とそこにあらわれる仏性・悟りが一体であるか、個別のものかと質問を切り替えた。子昭の見解は「万物」と「独露身」を一体とみるが、そこには万物と独

いました。子昭は答えることができませんでした。法眼は言いました。「森羅万象に顕現した仏性というものは、それらの区別を取り払って、別個にあるのでしょうか、それとも一体なのでしょうか」と。子昭は「本来の面目は存在を払い除けないように一体のものである」と言いました。法眼が言いました。「それでは二見の分別智です」。子昭に付き従ってきた僧達は「仏性は存在と別である」と言いました。法眼が言いました。「全ての事物に仏性は顕在しています。わかりますか」。

【頌】 頌曰。離念見佛破塵出經。現成家法誰立門庭。月逐舟行江練淨。春隨草上燒痕。撥不撥。聽叮嚀。三徑就荒歸便得。舊時松菊尚芳馨。

【訓読】 頌に曰く。念を離れて仏を見じ塵を破つて経を出す。現成の家法誰か門庭を立つ。月は舟を逐いて江練の淨きに行き、春は草に随つて焼痕に上る。撥と不撥と、聴くこと叮嚀にせよ。三徑荒に就て帰ること便ち得たり。旧時の松菊尚お芳香。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。分別心を離れば仏

露身という枠組みは消え去ってはいない。法眼はそれでは「両箇」で二つになり、分別心が残っていることを示した。二人のやりとりをみていた僧達は子昭の轍を踏まないように、独露身は存在という枠組みを取り払ったものというが、彼らもまだ分別から離れられないのである。法眼は万物・独露身という区別の消え去り、はからの全くない境地を最後に示したのである。そこに子昭が至ったなら、誰の法を嗣ぐかということが瑣末な問題であることにも気づくことを言いたかったのではないだろうか。

【釈意】

分別を捨てた時に、この世界が本来の面目を露にして、仏法を言

を見る事ができ、煩惱を滅したならば諸法が経となつて仏法を示すでしょう。このようにすべては仏の教えであるから、門派を立てることに意味はありません。月は船を追いかけるように澄みきつた川岸へと傾いて行き、野焼きをした後に青々とした草が茂り、春の訪れに気づくのです。払う払わないという言葉を注意して聴きなさい。道は荒れ果てていましたが家に帰ることができました。昔から庭に生えていた松は青々としており、菊は未だに芳香を放っています。

葉ではなくその身で語る存在となります。そうなつた時、自分などの門派に属しているかは問題ではなくなり、悟りを求める者は仏の教えを嗣ぐ者となるのである。独露した仏は、月が地平線に沈むように彼岸へと到る。冬に野を焼くように分別を断じ尽くせば、春になつて緑が茂るように悟りが現成するのである。これは人智を離れた自然の姿であり、それこそが仏法そのものであることを意味している。撥・不撥という法眼の問いを丁寧に参究したならば、芳香の漂う庭のような自己の本来の在り処へと回帰することができると説いている。

【語彙】

【子昭】(生没年不詳)宋代初期の人。はじめ長慶慧稜に師事したが、のちに法眼文益に嗣法した。【開堂】新命の任職が最初に行う儀式のこと。住持が仏祖の正法眼蔵を開演し、師への報恩と生霊への福寿を祈禱する。【地藏】地藏桂琛(867〜928)、浙江省の人。雲居道膺・雪峰義存に参じた後、玄沙師備に嗣法した。漳州の羅漢院に住したので羅漢桂琛ともいう。【辜負】背く。申し訳ない。【長慶】長慶慧稜(854〜932)、雪峰義存の法嗣。靈雲志勤・雪峰義存・玄沙師備に参じた。【一轉語】一語を下すことで相手を翻然と悟らせる意味のある語。【萬象之中獨露身】長慶が雪峰のもとで得悟の際に示した句「萬象之中獨露身 唯人自肯乃方親。昔時謬向途中覓 今日看来火裡氷」から。【漚】①念押し。②端的を表す語。それそのまま。【江練】河の水が澄み切つて岸辺に波打つ様子が白く際立つ様子。【三徑】陶淵明の「掃去來辭」から。「三徑荒に就けども、松菊猶存す」、庭の道は荒れ果てているが、庭木は青々として居る様子をうたつた。高い志を持つ人は世の栄枯盛衰に影響されないことを意味する。【舊時】①昔からある、古くからの。②本来の面目。

第六十五則 首山新婦

【本則】 擧。僧問首山。如何是佛 山云。新婦騎驢阿家牽。

【訓読】 挙す。僧 首山に問う、如何なるか是仏。山云、新婦 驢に乗れば阿家牽く。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。ある僧が首山に尋ねました。「仏とはどのようなものですか」と。首山が答えました。「花嫁が驢馬に乗れば姑が手綱を牽きます」と。

【釈意】

畑仕事からの帰りであろうか、嫁を乗せた驢馬を姑が牽いている。世間の常識からすると姑をいたわるものであるが、この公案に描き出される様子には世間体を離れ、差異のない平等な世界があらわされているのである。首山はこれこそ仏の行いと説いている。

【頌】 頌曰。新婦騎驢阿家牽。體段風流自然。堪笑學顰隣舍女。向人添醜不成妍。

【訓読】 頌に曰く。新婦 驢に乗れば阿家牽く。体段風流自然を得たり。笑に堪えたり 顰に毀う隣舍の女。人に向かって醜を添じ妍をなさず。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。花嫁が驢馬に乗れば

【釈意】

中国春秋時代、越国の有名な美人である西施が胸の痛む持病を発

姑がそれを牽きます。その様は自然で風情があるものです。笑うべきは、醜い女が隣の美人の真似をしても、ますます醜くなるだけで美しくないので。

した時、苦しげに胸を押さえ眉をひそめた。その姿が美しいとの評判を聞き、東施という村の醜女がこれを真似たがたいそう気味悪がられたという「東施効顰」の故事を引いている。禪においても、師の行実をなぞるのみではその人本来の悟りには至らない。それは美人の真似をして帰って己の醜さを際立たせてしまいうように、悟りに至った者の真似をしても未熟さのみが際立つことを意味している。

〔語彙〕

【首山】首山省念（926～993）。風穴延沼の法嗣。臨済の門風を多に広めた。【阿家】阿は助詞で家は姑の意。【体段】容姿、外見、様子のこと。【顰に顰う】「西施心を病む、心を捧げて顰すれば更に美を益す、隣家の醜女醜に習って更にその醜を増す」

【莊子】天運編」という故事から。優れた人の所業について、その本質を理解することなく、ただ形だけをまねること。猿真似。【妍】女性の容貌が整っている様子。

第六十六則 九峰頭尾

【本則】 擧。僧問九峰。如何是頭。峰云。開眼不覺曉。僧云。如何是尾。峰云。不坐萬年牀。僧云。有頭無尾時如何。峰云。終是不貴。僧云。有尾無頭時如何。峰云。雖飽無力。僧云。直得頭尾相稱時如何。峰云。兒孫得力室內不知。

〔訓読〕 擧す。僧 九峰に問う、如何なるか是れ頭。峰云く、眼を開いて曉を覚えず。僧云く、如何なるか是れ尾。峰云

く、万年の牀に坐せず。僧云く、頭有つて尾無き時如何。峰云く、終に是れ貴からず。僧云く、尾有て頭無き時如何。峰云く、飽と雖も力なし。僧云く、直に頭尾相い称うことを得る時如何。峰云く、兒孫力を得て室内知らず。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。僧が九峰道虔に、物事の始まりとはどのようなものでしょうか、と質問をしました。九峰は、眼を開いていても、朝が来たことを知りません、と答えました。僧は、極まりはどのようなものでしょうか、と質問をしました。九峰は、いつまでも自分の居場所に坐つていてはいません、と応じました。僧は、始まりがあつて終わりがないときはどういふときですか、と質問をしました。九峰は、「論理だけ分つていても、現実には働いていません」と。僧は、始まりも終わりもきちんと整つたときはどうですか、と質問しました。九峰は、「師の指導によつて悟りにいるように見えますが、祖師の真意までは理解できていません」と答えました。

〔釈意〕

僧の質問に九峰道虔が答えたもので、質問は①頭②尾③有頭無尾④有尾無頭⑤直得頭尾相称の五分類となる。『五灯会元』巻第五によると、五分類の問いは疎山匡仁にもあり、石霜慶諸が答えたものが残っている。石霜は九峰の師である。頭・尾は始・末などの二項の対立する概念があり、始まりがあつて、終わりがあつてよしとしたものである。眼は開いているが本当に見ることがしてない。修行は完成したがそれをどのように理解して私が使うのか分つていない。坐を立つて仏と同じように修行を実施しなければならず、修行僧は本来の自己を見出して人々を救う慈悲行に進むことである。

【頌】

頌曰。規圓矩方。用行舍藏。鈍躡棲蘆之鳥。進退觸藩之羊。喫人家飯。臥自家牀。雲騰致雨。露結爲霜。玉線相投透針鼻。錦絲不斷吐梭腸。石女機停兮夜色向午。木人路轉兮月影移央。

【訓読】

頌に曰く。規は円。矩は方なり。用うれば行い。舍つれば蔵る。鈍躡す。芦に棲むの鳥。進退す。藩に触るるの羊。人家の飯を喫して、自家の牀に臥す。雲騰つて雨を致し、露結んで霜と為る。玉線相投じて針鼻を透り、錦絲断えず梭腸より吐く。石女機停んで夜色午に向かい、木人路転じて月影央を移す。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。コンパスは丸を描き、定規は四角を描きます。用いられば出て己の道を行い、用いられなければ、その力は隠れます。芦に棲む鳥は鈍くつまずきます。垣根にひっかかった羊は行ったり来たりしているだけです。人の家の飯を食べて、自分の寢床に寝るようなものです。雲が騰つて雨を降らし、露が固まって霜となります。糸巻きに巻いた糸を針の孔に通し、錦の糸をつけた梭が左右に動いて、まるで糸を吐き出しているようにみえます。石でできた娘が機織り機を止めると、真夜中になります。木でできた人が歩く道を変えれ

【釈意】

コンパス・定規などの道具は、それらの使い方を知って用いることができてこそ、円形や四角形を現わすことができる。潜在した能力を仏性に喩え、自己の内在することを自ら知らなければ悟りに至らないという。自身の本性を会得できれば、自由自在に活動することができるが、分別にとらわれると、自在の作用も隠れてしまう。「頭・尾」ともに整っていない状態は、悟りの世界に坐り込んでいるようなものである。平等一色の世界に留まらず、日常の違いを鮮明な世界に戻ることがなければ真実を会得したことにならない。

ば、月の光が真上から西に移動していくのです。

【語彙】

【九峰】道虔（？～921）俗姓は劉氏。侯官県（福建省）の人。石霜慶諸の法嗣。筠州（江西省）の九峰山に住す。【規円矩方】規矩はコンパスと定規。【用行舍蔵】『論語』「述而篇」に基ずく。人が我を用いれば、進んで行い、我を捨つれば、退いて蔵れる。【進退触藩之羊】藩はまがき、かきね。『易経』「大荘」の「羝羊触藩、不能退、不能遂」による。【玉線・錦糸】ともに糸をさす。【梭腸】梭の目・口。【石女・木人】情識を離れたもの。【月影移央】真夜中から暁に近付くという意。

第六十七則 嚴経智慧

【本則】擧。華嚴經云。我今普見一切眾生具有如來智慧德相。但以妄想執著而不證得。

【訓読】 挙す。華嚴經に云く、我れ今 普く一切眾生を見るに如來の智慧德相を具有す。但だ妄想執著を以て証得せず。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。『華嚴經』に言っています。衲が悟つて、今一切の衆生をすべてみるとそれらが如來の智慧とすぐれた姿を身に備えています。しかし、妄想や執着があるために自分が仏であることが分っていないのです。

【釈意】

如來の智慧、仏教でいう智慧とは現象界の個々の物事の相違を認める智慧ではない。修行の成就とは、それまで自分になかった何かを手に入れることではない。六根の作用は訓練して手に入れたものでなく、生まれてからこのかた、初めてのことも、何度も経験したことも、飽きることなく映し出し、去りゆくときは一切の執着もなく去るに任せている。このように無我であることは本来

明確であるのに、あたかも我が存在するかのよう分別しているのは誤りである。

【頌】 頌曰。天蓋地載。成團作塊。周法界而無邊。析鄰虛而無内。及盡玄微。誰分向背。佛祖來償口業債。問取南泉王老師。人人只喫一莖菜。

【訓読】 頌に曰く。天は蓋い地は載せ、団となし塊を作す。法界に周くして辺なく、隣虚を析いて内無し。玄微を及盡す。誰か向背を分たん。仏祖来たつて口業の債を償う。南泉の王老師に問取して、人人只だ一莖菜を喫す。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいたしました。(仏心は)天のように覆いかぶさり、地のようにすべてを載せて、一団の塊となつています。それは、大きくは法界に周く行きわたつて極まりなく、小さくはどれだけ細かく砕いても極まりがありません。極め尽くしてみれば、得るべき悟りも、捨てるべき煩惱もないのです。仏祖がやって来て説法の罪を償います。そのことがわからなければ、あの南泉普巖に問うてみなさい。一人一人ただ一本の菜をよく味わうべきというでしょう。

【釈意】

この世界が仏そのものであり、教えとはこの世界の存在すべてを指すと宏智はいう。大小、清濁の分別に惑わされることなく、真実を会得しなくてはなりません。仏は、説法により人々を惑わせた罪を償うと述べて、仏の言説といえども、分別を加えれば誤りとなると諫めている。その点を、南泉を例に出して、滞ることも捨てることも誤りともいう。

【語彙】

【隣虚】『華嚴經』の引用。世界における極小のものを表している。【及尽玄微】玄微は『華嚴経疏』の引用。幽玄（奥深い味）といふこと。微妙をいう。【償口業債】三業の一。妄語であれば悪報を受ける。【南泉王老師】南泉普願（748～835）王老師と自称す。【喫一莖菜】南泉と杉山の間で交わされた問答。【杉山】杉山智堅（伝不詳）。馬祖道一の法嗣。池州（安徽省）の杉山に住す。【三業】身体の行為にある身業・言語表現である口業・心のはたらきである意業の三つ。

第六十八則 夾山揮劍

【本則】舉。僧問夾山。撥塵見佛時如何。山云。直須揮劍。若不揮劍。漁父棲巢。僧問石霜。撥塵見佛時如何。霜

云。渠無國土。何處逢渠。僧廻舉似夾山。山上堂云。門庭施設不如老僧。入理深談猶較石霜百步。

【訓読】

挙す。僧 夾山に問う、塵を撥つて仏を見る時如何。山云く、直に須らく劍を揮うべし。若し劍を揮わずんば、漁父巢に棲まん。僧 石霜に問う。塵を撥つて佛を見る時如何。霜云く、渠に国土無し。何れの處にか渠に逢わん。僧廻つて夾山に挙似す。山上堂して云く、門庭の施設は老僧に如かず。入理の深談は猶お石霜と百歩に較れり。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。ある僧が夾山善会に尋ねました。「塵を払い除き、仏と相見した時はどのようなすれば良いでしょうか」と。夾山は「直ちに劍で断ち切ってしまうことです。もし、劍を揮わないの

【釈意】

ここでいう、塵とは煩惱妄想を指す。つまり僧は、「煩惱が無くなり、仏の真理を会得した時どうしたらいいのか」を二人の師に質問するのである。夾山は「仏の真理を会得する」ということは、漁師が家に留まっているようなもので、何の役にも立たない。つ

ならば、漁師が家に居ると変わりありません」と答えました。僧は石霜に尋ねます。「塵を払い除き、仏と相見した時はどのようにすれば良いでしょうか」と。石霜は答えます。「彼は決まった場所には居ません。そんな彼にどうやって逢おうというのですか」と。僧は、夾山のもとに戻り、石霜との話をしました。夾山は、僧堂に上がり説きました。「衲の方が宗旨の方便手段は優れています。しかし、甚深微妙の道理を説くことは石霜の方が百歩先を歩きます」と。

【頌】 頌曰。拂牛劍氣洗兵威。定亂歸功更是誰。一旦氛埃清四海。垂衣皇化自無為。

【訓読】 頌に曰く。牛を拂う劍氣 兵を洗う威。乱を定めて功を帰す 更に是誰ぞ。一旦 氛埃四海に清し。衣を垂れて皇化自から無為。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいました。星のひこぼしを撃ち落とすほどの宝劍の力。天が雨を降らして兵を洗う武王の威光。戦乱は鎮定し元の平穩無事の世界に戻

まり、悟りに安住することなく、それすらも切り捨てろ」と言う。僧は、今度は石霜にも同じ質問をする。ここで石霜が答える「彼」とは仏のことである。尽天法界のあらゆるものが仏であるので、決まった仏の所在などはあり得ないと言っている。最後に夾山は、「師家が修行者を導く時、色々な方便を設けること」「深遠な道理を窮め尽くして説くこと」を石霜との特徴の違いを修行僧の前で示した。しかし、「百歩に較れり」とあるように百歩先はすぐ目と鼻の先であり、同じ境地にいてと言っているのである。迷悟の分別を脱したところに真実の仏法が現れるのである。

【釈意】

星を払う宝劍とは、夾山の発した「須らく劍を揮うべし」のことである。夾山は、武王が紂王を討伐するように勢いがあり、石霜は、雨で兵を洗うように天さえも敬意を払うのである。夾

りました。他に誰に聞く必要があるでしょうか。いったんは、塵煙もあがりましたが、天下は清々に治まりました。それは、天子が衣冠束帯して人々の前にでること、人々は自ずと徳威を感得するのと同じです。

山の「仏を斬る」といった激しい言葉を「乱」とするならば、石霜の説示は「定」である。この、二祖だからこそその教えであると宏智は言っている。一度は、この夾山の「仏を斬る」で叢林にも論争が起こったであろうが、石霜が登場して叢林を鎮めたというのであろう。そのため、夾山の方便に迷う者もあり、石霜の直截な教示がそれを補ったのである。

〔語彙〕

『碧巖録』八九則に同じ。『嘉興大藏經』第27冊「石霜爾瞻尊禪師語錄」二巻にもあり。補註参照【夾山】夾山善会(805～881) 船子徳誠の法嗣。夾山靈泉院の開山。【石霜】石霜慶諸(807～888) 道吾円智の法嗣。【門庭施設】門庭は禪の宗旨。または家の奥に導く前段階の意で、方便のこと。施設は方便手段を施し設けること。師家が修行者を導く時、色々な方便を設けること。第二義門として仮に施すもので、第一義門をあらわす入理深談との対語。師家は巧みに両者を使い分けて学人を導く。【入理深談】甚深微妙の心理に悟入すること。深遠な道理を窮め尽くして説くこと。門庭施設の対語。碧巖録八八則 玄沙接物利生の垂示にも使われる。【牛を拂う劍氣】『晋書』雷煥と張華が手に入れた二振りの宝劍のうちの一つ。「天界の星宿の斗宿と牛宿の域間が毎夜紫色に光るので、張華が尋ねると、占星術に長けた雷煥は宝劍の精だと言う。張華は雷煥に宝劍の搜索を依頼。雷煥は二本の宝劍を見つけ、一方を自分で持ち、他方を張華に贈った。」という故事からなる。【兵を洗う威】周の王が紂王を討伐するとき、晴天がたちまち大雨になった。その時、散宜生がこの戦は不吉だと言ったが武王はこれを退け「天、兵を洗うなり」といい兵を進め、紂王の軍を見事に破った。【四海】東西南北の四方の海。天下。【皇化】天子の徳化。徳によって教化すること。

〔補註〕

* 嘉興大藏經 第27冊 石霜爾瞻尊禪師語錄 二巻

舉僧問夾山撥塵見佛時如何 山云欲知此事直須揮劍若不揮劍 漁父棲巢 後僧如前問 普會諸禪師語云 渠無國土甚處逢 渠僧卻舉似山山云門庭施設不無夾山人理深談猶較石霜百步護國元云參須實參見須實見毫端許言之本末皆為自欺今夜忽有人問三峰撥塵見佛時如何和聲便打還會麼真金自有真金價終不和沙賣與人師拈云夾山為眾竭力禍出私門石霜覩露全機遭人遡摸護國要且只有利

人之心且無出人之眼、眾中忽問山僧、撥塵見佛時如何、亦與和聲、便打待伊、擬議擲下拄杖云、從前汗馬無人識、且要重論蓋代功。

* 屈原『漁父辭』

屈原既放、游於江潭、行吟沢畔。顏色憔悴、形容枯槁。漁父見而問之云、子非三閭大夫與。何故至於斯。屈原云、拳世皆濁、我独清。眾人皆醉、我独醒。是以見放。

漁父云、聖人不三凝滯於物、而能与世推移。世人皆濁、何不滌其泥、而揚其波。眾人皆醉、何不餽其糟、而歎其醜。何故深思高舉、自令放為。

屈原云、吾聞之、新沐者必彈冠、新浴者必振衣。安能以身之察察、受物之汶汶者乎。寧赴湘流、葬於江魚之腹中、安能以皓皓之白、而蒙世俗之塵埃乎。

漁父莞爾而笑、鼓枻而去。乃歌云、滄浪之水清兮、可以濯吾纓。滄浪之水濁兮、可以濯吾足。遂去、不復与言。

〔和訳〕

屈原は追放されて湘江の淵や岸をさまよい、歩きながら沢のほとりで歌を口ずさんでいた。顔色はやつれはて、その姿は瘦せ衰えている。老人の漁師が彼を見るとたずねて言った。「あなたは三閭大夫さまではありませんか。どうしたわけでこんなお姿になったのですか。」屈原は言った。「世の中がすべて濁っている中で、私独りが清らかである。人々すべて酔っている中で、私独りが（酔いから）さめている。だから追放されたのだ。」

老漁師は言った。「聖人は物事にこだわらず、世間と共に移り変わるのです。世の人がみな濁っているならば、なぜ（ご自分も一緒に）泥をかき乱し、その濁った波を高くあげようとしなさいのですか。人々がみな酔っているなら、なぜ（ご自分も）その酒かすを食べて、薄い酒を飲もうとしないのですか。どうして深刻に思い悩み、お高くとまって、自ら追放されるようなことをなさるのですか。」

屈原は言った、「私はこう聞く。『髪を洗ったばかりの者は、必ず冠の塵を弾き（よごれを払って）から被り、入浴したばかりの者は、必ず衣服をふるって（塵を落として）から着るものだ』と。私自身の潔白な身に、汚れたものを受けることができるだろうか。（それなら）いつそのことの湘江の流れに行つて（身を投げて）、川魚の（えさとなって）腹の中に葬られても、どうして純白の身を世俗の塵やホコリを受けられるだろうか。」

老漁師はにつこりと笑い、(ふなばたを) 櫂で叩きながら漕ぎ去った。そしてそのとき、こう歌った。
滄浪の水が澄んでいるのなら、(大切な) 冠の紐を洗おう。
滄浪の水が濁っているのなら、(汚れた) 私の足を洗おう。
とうとうそのまま去って、二度と語り合うことがなかった。

第六十九則 南泉白牯

【本則】 擧。南泉示眾云。三世諸佛不知有。狸奴白牯却知有。

【訓読】 挙す。南泉衆に示して云く、三世諸佛 有ることを知らず。狸奴白牯 却って有ることを知る。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。南泉普願が大眾に語りかけました。「三世諸佛は有るということを知らないが、かえって、猫や牛といった動物のほうが有るということを知っている」と。

【釈意】

ここでは、悟りや仏法の境地についての有無を説いている。仏法の本来の立場からいえば、本来は仏とか動物の区別は無い。故に、悟りの境地にある三世諸佛は、凡聖、迷悟などを分別する必要はないが、凡夫はかえって悟りを外に求めて分別に滞ってしまうのである。

【頌】 頌曰。跛跛挈挈。甃甃甃甃。百不可取。一無所堪。默默自知田地穩。騰騰誰謂肚皮憨。普周法界渾成餅。

鼻孔鼻垂信飽參。

〔訓読〕 頌に曰く。跛跛挈挈、毳毼毼。百取るべからず。一も堪ゆる所なし。黙黙として自ら知る田地の穩やかなることを。騰騰として誰か肚皮慙なりと謂わんや。普周法界 渾て飯と成す。鼻孔鼻垂として飽參に信す。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいました。手足の自由も利かず、衣服や髪も乱れています。百を取ろうとしても、一つも取れずにいます。静やかに坐して、はじめて自らの境涯が穩やかであると知りました。あえて駆け回り、馬鹿者がいると言ひ募る人もいないでしょう。あまねく法界をすべて飯にして食べ尽くしています。だらりと垂れた鼻腔からは深い息を吐き、その姿から、真実を充分に会得しているようです。

〔釈意〕

南泉は姿や形にとらわれること無く、すべてに分別を加えることなく悠々としている。頌では布袋の姿を彷彿とさせる表現が連ねられている。真実を会得したことを誇ることなく、人々を導くという意識もない。自らを仏と意識することなく、ありのままの自己がそこにある。

〔語彙〕

『碧巖録』六十一則に同じ。【南泉】南泉普願(748〜834)法嗣。【三世諸佛】三世に出現する諸仏は、絶対界に住して、仏の本質である仏性そのものになりきっている。したがってそれをこと新しく相対的知覚において認知する要はないという意。【狸奴白牯】狸奴は猫類。白牯は牛。文字や仏法を理解できない動物の意。成仏作祖は既に悟りの境地にある三世諸仏はあざかり知らぬが、凡夫がかえって悟りを外に求めて関心を示すという意。【跛跛挈挈】跛は足なえ。挈は手なえ。ものの整わない様。【毳毼騰騰】愚の如く魯の如くして窺測しえぬ道人の相に例える。毼も騰も共に、毛の長い様。髪が乱れて、とりとめの無くみえる様が原義。【騰騰】駆け回り動くさま。【肚皮慙】肚皮は腹のこと。慙とは愚者。根っからの馬鹿者。【鼻垂】垂れ

下がつている。【飽參】十分に会得する。悟りを得て參師の必要がなくなること。

第七十則 進山問性

【本則】擧。進山主問脩山主云。明知生不生性。爲什麼爲生之所留。脩云。苟畢竟成竹去。如今作箴使還得麼。進

云。汝向後自悟在。脩云。其甲只如此。上座意旨如何。進云。遮箇是監院房。那箇是典座房。脩便禮拜。

【訓読】擧す。進山主脩山主に問うて云く、明らかに生は不生の性なることを知らば、什麼としてか生の為に留められ

るるや。脩云く、苟畢竟竹となり去る。如今蔑と作して使うこと還つて得んや。進云く、汝向後自ら悟り去

ることが在らん。脩云く、其甲只此くの如し。上座の意旨如何。進云く、這箇は是監院房、那箇は是典座房。脩

便ち禮拜す。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。進溪洪進が竜濟紹修に問います。「生があるのは、その底に不生があることを明らかに知っていても、生の想いの中に留め置かれるのはなぜですか」と。紹修は「筍は竹になるのです。今竹細工に使おうとしてもそれは出来ません」と言いました。洪進は「君はいつでも自らの境地に達

【釈意】

洪進と紹修は共に羅漢桂琛の弟子である。本則では兄弟弟子同士の間答が行われている。最初に洪進は生と不生の句で紹修に質問している。この句で人には本来仏性が備わっているならば、なぜ修行しなくてはならないのかを聞いている。紹修は筍と竹を用いて答えた。筍が竹になることはありのままであり、諸法実相を意味している。紹修は、今のままでは悟りの境地に達しないと、洪

することでしょう」と告げました。紹修は「あなたの言うとおりです。洪進上座のお考えはどのようなものですか」と聞きました。洪進は「こちらは監院寮、あちらは典座寮です」と。これを聞いて紹修は礼拝しました。

【頌】 頌曰。豁落亡依高閑不羈。家邦平貼到人稀。些些力量分階級。蕩蕩身心絶是非。是非絶。介立大方無軌轍。

【訓読】 頌に曰く。豁落として依を亡じ 高閑にして羈がれず。家邦平帖到る人稀なり。些些の力量 階級を分かたず。蕩蕩たる身心 是非を絶す。是非を絶す。介り大方に立つて軌轍なし。

【和訳】 天童覚和尚が頌にいたしました。心が開けて落ちつくことで、依りどころが必要なくなり、枠にはめられることがなくて、繋がれることがなければ、本来の居場所に居られるのですが、そのような人は希なものです。修行の成果の僅かな違いが、境地の大きな差となります。心がゆつたりとして、自己の見解という分別を加えることがあります。分別を加えるこ

進に言うのである。紹修は素直に洪進の言うことを受け止め、どういった修行を行えばいいのか聞くのである。洪進は監院寮と典座寮という。眼前の事象を、ただ平等という一元的に会得するのみでは、ありのままという事実が到達したことにならない。監院寮と典座寮という現実の区別が必要なのである。洪進は日常生活こそ真実が顕現していることを言うのである。

【釈意】 知解の領域に留まる限り、自分が得た智慧という枠内において、自らを限定した範囲に留め置くことになる。智慧の内外という規矩を立てて、外を迷といい、内を悟と分別するのである。真に悟道の人は、自分で軌轍を敷くことは無く、他に軌轍を敷いてもらうことも無い融通無碍を得ているのである。

とがないので、定められた轍などの上を走ることがなく、本来の自在の境地に在るのです。

【語彙】【進山主】洪進（詳細不詳）のこと。唐代の人で青原下である羅漢院桂琛の法嗣。湖北省襄州清溪山に住した。後に天平山にも住す。【脩山主】紹修（詳細不詳）のことで唐末五代の人。進山主と同じく羅漢院桂琛の法嗣。撫州竜濟山に住した。【畢竟】要するに、つまりなどの意。【如今】今などの意。【意旨】心で考える趣旨。こころざし。【家邦平帖（帖）】家邦は本家郷のこと、人々の拠って安住すべき真実の境界のこと。帖は静かなこと。至極の境界が迷悟・凡聖・是非・得失等の一切の羈絆束縛を超脱して太平安穩なることをいう。【階級】迷悟・凡聖などの相対的世界、相対的・対立的な境地。また、修行の階級。【此些】わずかなさま、とるに足りないさまのこと。【蕩蕩】きわめて大きいさまのこと。心がゆったりとしたさま。【大方】大叢林のこと。【軌轍】車のわだち。転じて法則・事蹟。

第七十一則 翠巖眉毛

【本則】擧。翠巖夏末示眾云。一夏已來。爲兄弟説話。看翠巖眉毛在麼。保福云。作賊人心虚。長慶云。生也。雲門云。關。

【訓読】 挙す。翠巖夏末に衆に示して云く、一夏已に来る。兄弟の為に説話す。看よ翠巖に眉毛在りや。保福云く、賊と作る人心は虚なり。長慶云く、生ぜり。雲門云く、関。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。翠巖令参が、夏安居の最終

【釈意】

本則では四人の禅僧が登場している。四人とも雪峰義存の弟子た

日に大衆に向っていいました。「この度の夏安居において、諸兄弟のために説法を行ってききました。見なさい、どうでしょう。衲の眉毛はありますか」と。保福從展は「盗人の心は虚しいものです」と言いました。長慶慧稜は「ちゃんと眉毛は生えていません」と言い、雲門文偃は「関」と言いました。

ちである。翠巖によって問答が始まり、順に禅僧が答える場面である。このような問答は第二十四則の「雪峰看蛇」で行われた問答と同じ形態といえる。また、『碧巖録』にも同様の公案が記載されている。

翠巖は夏安居に入って、一層厳しく接化を行っていたのである。安居の終わりに、大衆に向かって、衲に眉毛があるか、と聞くのである。修行僧が誤りを犯せば、仏罰として眉毛が抜け落ちる。そういった罰も顧みず、接化のため説法することを「眉毛惜しまず」という。翠巖は夏安居を通して、説法し続けてきた。自分の眉毛があるのかを問うことで、修行僧の境地を点検しようとしたのである。それを輔佐したのが保福、長慶、雲門の三禅匠である。

最初に答えた保福は「賊と作る人心は虚なり」と言う。盗賊は細心に注意して盗みに入る。様々に考えすぎれば、身体を自由を失って捕縛されてしまう。それと同じで、師僧は接化の方途を様々に想えば自由を失って本来の指導にならない。「虚なり」というのは、良くできていたとの意味である。次に長慶はちゃんと眉毛は生えていると言う。これは翠巖に対して、誤りは無かったから安心してよいといっている。最後に雲門が答えるが、雲門は

「関」の一言だけであった。保福、長慶の二人は、出来と不出来に捕らわれている。雲門はその対立を断じ、さらには翠巖の問いかけさえも不要なこととして、「関」と応じたのである。

【頌】

頌曰。作賊心過人膽。歴歴縦横対機感。保福雲門也垂鼻欺唇。翠巖長慶脩眉映眼。杜禪和有何限。剛道意句一斉割。埋没自己也飲氣吞聲。帶累先宗也面牆儻板。

【訓読】

頌に曰く。賊と作る心 人に過ぎたる胆。歴歴縦横機感に對す。保福 雲門 垂鼻唇を欺く。翠巖 長慶 脩眉眼に映ず。杜禪和何の限りあらん。剛いて道う意句一斉に割ると。自己を埋没して氣を飲み 声を吞む。先宗を帶累して牆に面い板を担う。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいたしました。盗人の心は飛び抜けて剛胆です。心に捕らわれが無いので、自由に持てる力を發揮している。保福と雲門はずば抜けた力量を具えています。翠巖と長慶も修行が熟して、優れた力量を具えています。真の仏法を明らかにしていない禅僧は、翠巖のこの一句で、夏安居のすべてが無に帰したといえます。しかし、翠巖が切断したのは、大衆の分別心です。ここがわからなければ、仏

【釈意】

翠巖ははじめずば抜けた禅匠が問答を繰り広げている。その様子を宏智は「歴歴縦横機感に對す」と言っている。夏安居が終わって、修行僧は思い思いに散じてゆく。その餞別がこの言葉であった。心して修行を専一に続けなさいというのである。保福・雲門、翠巖・長慶を二人ずつ挙げて、「垂鼻唇を欺く」と「脩眉眼に映ず」の句で賛嘆している。どちらの意味も高度な力量を兼ね備えたことを示しており、宏智は四人を力量に人というのである。しかし、中でもとらわれない返答をしたのが雲門である。

祖の顔に泥を塗り、一面しかみえていない愚か者となるでしょう。

その一句を心に留めて、自己の真実を究明しなくてはならないという。

〔語彙〕

【翠巖】翠巖令參（詳細不詳）のこと。五代の人で雪峰義存の法嗣。【保福】保福從展（？〜928）のこと。五代の人で雪峰の法嗣。【長慶】長慶慧稜（854〜932）のこと。雪峰の法嗣。【雲門】雲門文偃（864〜949）のこと。雪峰の法嗣。【關】関門のこと。通過しがたい関所、または險所の意。禪宗では「祖師の関」などと用いり、古来通りがたい公案をいう。【機感】機は機類（眾生のこと）、感は感応（仏と修行者との心が相交流すること）の意。師家に教導を請いに来る学人のこと。【垂鼻脣を欺く】鼻が下方に長く垂れ下がっていて、唇と見まちがえること。規格にはまらない高德のさま。抜群の力量を持った人のこと。【脩眉眼に映ず】眉毛が長く伸びて眼の前まで下がっている。高德な様子を表し、修行が熟し徳風が十二分に身に付いていること。【杜禪和】杜撰禪和の略。真に仏法を明らかにすることのない禪僧のこと。【意句】意志と文句。心もちとそれを表す言葉。【氣】呼吸の息。【帶累】とらわれ、かかずらう。また、累を及ぼすや迷惑をかけることとも。【牆】ついじ、土掘りのこと。また間をさえぎるもの。

第七十二則 中邑獼猴

【本則】擧。仰山問中邑。如何是佛性義。邑云。我與獼說箇譬喩。如室有六牕中安一獼猴。外有人喚云狂狂獼猴即應。如是六牕俱喚俱應。仰云。只如獼猴睡時又作麼生。邑乃下禪牀把住云。狂狂我與獼相見。

〔訓読〕 挙す。仰山中邑に問う、如何なるか是れ仏性の義。邑云く、我汝が与に箇の比喩を説かん。室に六窓有り中に一獼猴を安く。外に人有りて喚んで獼猴と云えば獼猴即ち応ず。是の如く六窓俱に喚べば俱に応ずるが如し。仰云く、只獼猴睡る時の如きは又作麼生。邑乃ち禪床を下つて把住して云く、狂狂我汝と相見せり。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。仰山慧寂が中邑洪恩に問いました。「仏性の道理とはいかなるものなのでしょうか」と。中邑は言いました。「では、あなたのためにこのようなたとえ話をしましょう。六つの窓がある部屋に一匹の大猿を入れます。外から人が、窓の中に向かって「猩猩」と呼べば、大猿はすぐに応じるでしょう。同じように六つの窓から、また同じように呼べば、また同じように応じるでしょう」と。仰山は言いました。「ただ、大猿が眠っているときはどうなるのでしょうか」と。中邑はすぐに座から降りて厳しい口調で言いました。「おい、猩猩、柄はお前と向き合っているのだぞ」。

【頌】

頌曰。凍眠雪屋歲摧頽。窈窕羅門夜不開。寒槁園林看變態。春風吹起律筒灰。

〔訓読〕

頌に曰く。雪屋に凍眠して歳摧頽。窈窕たる羅門夜開かず。寒槁せる園林変態を看る。春風吹き起こす律筒の灰。

〔釈意〕

中邑は仰山の問いに対してたとえ話で応じた。ここでの室は肉体、六窓は六根、獼猴は心の動きを指す。獼猴は五欲の盛んな凡夫に例えられるものであり、猩猩は仏の例えとして使い分けられている。中邑は「心が六根を通じて外世界を知覚する」と言った。それに対し、仰山は「本人が眠っていて自覚がない場合は仏性はどうなるのでしょうか」とたずねた。中邑は仰山に見所があると思ひ、あえて厳しい態度で臨み、仰山はすでに仏（＝猩猩）であると言ったのである。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいました。雪に埋もれた屋敷の中で眠りこけて年が暮れてしまいました。静かで葛のはった閑居の門は、夜は開くこともありません。冬枯れた林もやがて季節が移り、様子が変わっていくでしょう。春の陽気を受けた風が筒の中の灰を吹き飛ばすことです。

〔釈意〕
中邑と出会う前の仰山は、年の暮れに雪に埋もれて眠りこけている袁安のようなものであり、閑居の扉を閉めてしまっている。仰山には分別が葛のようにからまっていて、自分が仏であることに気づいていない。中邑の教えによって仰山の迷いが晴れようとしている。その陽気によって、再び活気を取り戻すであろう。中邑との出会いが、仰山に自分が仏であることを自覚させることになった。

〔語彙〕

【中邑】中邑洪恩（生没年不詳）のこと。馬祖道一の法嗣。朗州中邑山（湖南省）に住したことから中邑と称される。【仰山】仰山慧寂（807〜883）のこと。俗姓は葉氏、韶州須昌（広東省）の人。瀉山靈祐の法嗣。その門流を瀉仰宗という。【六窓】ここの窓とは六根（眼、耳、鼻、舌、身、意）への刺激の入口を指している。【獼猴】大猿。ここでは猩猩と同意で仏性をさす。【猩猩】中国で、想像上の怪物。面貌人に類し、よく人語を理解し、酒を好むという。この伝説により大猿全般を猩猩と称することもある。【禅床】坐禅を行う単のこと。住持の場合は椅子。【把住】師が弟子を指導する際、弟子に解答を強く求めたり、その考えを叱責するなど、厳しい態度をとること。【凍眠雪屋】袁安（生年不詳〜92、後漢初期の官僚）の故事による。袁安が官途につく以前、彼の家の辺りが大雪に見舞われたが、袁安は平然と眠り続け、餓死を心配してたずねてきた官吏に対し、皆が食糧を求めて困っている中で自分まで出て行ったら迷惑であると答えたという。【律筒灰】陽気の発するのに例えられる。

第七十三則 曹山孝滿

【本則】 擧。僧問曹山。靈衣不掛時如何。山云。曹山今日孝滿。僧云。孝滿後如何。山云。曹山愛顛酒。

【訓読】 挙す。僧曹山に問う、靈衣掛けざる時如何。山云く、曹山今日孝滿。僧云く、孝滿の後如何。山云く、曹山顛酒を愛す。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。ある僧が曹山本寂に「孝子が靈衣を着ないという時はどのようなものですか」と問いました。曹山は言いました。「すでに三年の喪が明けていて、着るとか着ないという話が出る時期ではないようなものだ」と。僧はいいました。「実際に喪が明けていればどうなものでしょうか」と。曹山は言いました。「衲は孝滿になれば大酒を飲んで酔いつぶれるよ」と。

【釈意】

この僧は儒教の孝滿を例に挙げ、修行を終えた後の悟りの境地とどのようなかを曹山に問うた。曹山は未熟な僧に対し段階をふんで教えることを考え、「悟りとは修行を終え、自分と仏が一体となることだ」と説示した。つまりは日常の変わらない姿を保ちながら接化を行うことを曹山は示したのであるが、しかしながら僧は悟りの後の姿を求めようとしたため、曹山は「喪が明ければいつもどおり酒を飲むよ」と言って、修行を終えた後は本来の自分を働かせて人々を導いてゆくべきなのだとことを示した。

【頌】

頌曰。清白門庭四絕鄰。長年關掃不容塵。

光明轉處傾殘月。爰象分時却建寅。新滿孝。便逢春。醉歩狂歌

任墮巾。散髮夷猶誰管係。太平無事酒頂人。

〔訓読〕 頌に曰く。清白の門庭四に隣を絶す。長年閑し掃って塵を容れず。光明転ずる処傾いて月を残し、爰象分るる時却って寅に建す。新たに孝を満じ、便ち春に逢う。酔歩狂歌墮巾に任す。散髮夷猶誰か管係せん。太平無事酒顛の人。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいました。孝子の清らかな門庭は隣近所から隔絶しています。長い間、門を閉ざし、また、塵一つなく掃き清められています。しながら、やがて月は傾き、光明も移り変わってゆくでしょう。陰がやがて陽となり、東方が輝きまします。三年間の喪が満ちて、春を迎えました。酔っ払い歩いて陽気な詩を吟じ、帽子も落としたままです。髪は整えず、ぶらぶらとして誰一人お構いなしです。実に気楽な酒飲みではありませんか。

〔釈意〕

悟りの境地を求めて修行を行う姿は確かに清廉で近寄りがたいものがあるが、そのみに囚われていては周囲から孤立して現実から離れてしまう。修行が成就した後は本来の自分を表に出して慈悲の実践という次の段階に移るべきである。太陽が昇るように、また雪が解けて春になるように日常の姿に戻って接化を行う姿こそ、曹山が説く心境である。孝満を終えた子供がしばしばはめをはずして遊びまわるような姿は布袋の歩みに擬せられるものであり、その自由気ままで人を導いてやるという意識すらない姿こそが望ましい真の接化の姿なのである。

〔語彙〕

【曹山】曹山本寂（840〜901）のこと。洞山良价の法嗣。元証大師。【靈衣】中国で用いられる白い喪服のこと。【孝満】父母の喪が明けること。中国の礼として、父母の没後、三年間は喪服を着る習慣がある。【顛酒】酔いつぶれるほどに酒を飲むこと。【爰象分るる時却って寅に建す】爰は易の卦を構成する要素。陰爰が転じて陽爰となる様子を指し、日が昇る東方を指す

寅によって、陽氣を発見したという意味を表している。【夷猶】しつかり歩かず、ゆつくり歩くさまを表す。また、酒酔いの風体を指している。ここでは布袋を指している。また布袋は弥勒菩薩の化身とされている。

第七十四則 法眼質名

【本則】 擧。僧問法眼。承教有言。從無住本立一切法。如何是無住本。眼云。形興未質。名起未名。

【訓読】 挙す。僧 法眼に問う、承るに教に言うこと有り。無住することなくして本より一切の法を立つと。如何なるか
是れ無住の本。眼云く、形は未質より興り 名は未名より起こる、と。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。修行僧が法眼文益に質問しました。「伝え聞く教えには、一つの状態に定まらない根幹から全ての存在のあり方があらわれるとあります。この一つのことにとらわれない根幹とは、どのようなものでしょうか」と。法眼は言った。「形は定まっていなことから形となり姿が決まり、名は決まっていなことから名が決まる」と。

【釈意】

「教」というのは大乘經典の『維摩經』の觀衆生品であり、文殊と維摩が「無住本」について問答を行なっている。僧侶はその中にある「一つの状態に定まらない根幹」について法眼に尋ねた。これに対して法眼が取り上げたことは、東晋代の僧肇が著した『宝蔵論』 広照空有品にみられるもので、「形は未質より興り名は未名より起こる」とあり、「本来の根幹に対して、余計な思い込みが入ると、物事の本質を見ることはできず、形や名前がつくのは、見たり聞いたりする当人が何かにとらわれているからであ

る」ということである。

法眼は分別を離れるべきであることを示しており、教典の文言へのこだわりや無住への執着からそれを伺うことが出来る。法眼は『宝蔵論』を取り上げているように、ことさらに教典の一句で応じているが、彼のいう分別の関わらない無住こそ真実であるというのである。姿が現れて名が決まることが、分別を生み出す根幹になるのだという。

【頌】

頌曰。沒蹤迹。斷消息。白雲無根。清風何色。散乾蓋而非心。持坤輿而有力。洞千古之淵源。造萬象之模則。刹塵道會也。處處普賢。樓閣門開也。頭頭彌勒。

【訓読】

頌に曰く。没蹤跡。断消息。白雲根無く、清風何の色ぞ。乾蓋を散じて心あるに非ず。坤輿を持して力有り。千古の淵源を洞らかにし、万象を模して則を造る。刹塵に道を会するや、処々普賢。樓閣の門開くや、頭頭彌勒。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいます。跡形をくらし、すべての消息を絶ちます。あたかも、白雲は無心にして無礙自在に去来し、さわやかな風にはどのような色もないようなものです。それらは天に散らばっていて、分別心があるわけではありません。大地はその

【釈意】

本則における「一つのことにとらわれない根幹」について、ここでは白雲と風に例えている。雲も風も固定した実体がなく、その様子は過去は過ぎ去り、未来も定まっていけないという状態と重ねることができるとし、天と地があつて、この世界があり、それが真実であるとした。そして物事の根本は大きな力を持ち、それを

上のものを支える大きな力を持っています。無限の過去からの根本をはっきりさせて、あらゆる事物に適した存在としてのきまりがでています。即座に仏道を会得できれば、この世界の至る所が普賢菩薩の働きの場となっていることも、樓閣の門が開けば、一つ一つの事物に弥勒菩薩が宿していることもわかります。

はつきりさせることで、今、目の前にあるこの世界が真実そのものと会得すれば、どのような僅かな物にも仏心が宿るとわかれば、この世界は普賢菩薩の遍満であるという。また、樓閣の門とは凡夫の見という意味であり、そこが開くのは分別から脱したことをいう。世の中のあらゆるものに弥勒菩薩が宿り、今もこれからもこの世界が仏の世界という。

〔語彙〕

【法眼】法眼文益（855～958）のこと。法眼宗の祖。余杭（浙江省）の人。【無住】固定した実体のないこと。執着したりしないこと。【没蹤跡】跡形がないこと。【断消息】何の音沙汰もないこと。【坤輿】大地のこと。【千古】遠い昔。【淵源】物事の成り立ってきた源。【万象】あらゆる事物。【普賢】普賢菩薩の略。仏の理・定・行の徳を代表する。【弥勒】弥勒菩薩の略。兜率天で説法をしているとされ、釈迦の入滅してから五十六億七千万年後に、仏となってこの世に現れる。

第七十五則 瑞巖常理

【本則】擧。瑞巖問巖頭。如何是本常理。頭云。動也。巖云。動時如何。頭云。不見本常理。巖佇思。頭云。肯即未脱根塵。不肯即永沈生死。

〔訓読〕 擧す。瑞巖、巖頭に問う、如何なるか是れ本常の理。頭云く、動ずるなり。巖云く、動ずる時如何。頭云く、本常の理を見ず。巖佇思す。頭云く、肯んずれば即ち未だ根塵を脱せず。肯んぜざれば即ち永く生死に沈む。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。瑞巖師彦が巖頭全歳に質問しました。「時、場所を越えて変わることをない教えとはどのようなものでしょうか」と。巖頭は言いました。「全ては移り変わるものだ」と。瑞巖は言いました。「動く時はどのような時をいうのでしょうか」と。巖頭は言いました。「仏法の真理をわかっていない時だ」と。瑞巖は考え込みました。巖頭は言いました。「すべては変化するという分別があれば、迷いの世界から抜け出すことができない。すべて空だと識ることが無ければ、永遠に迷いの世界から脱することが出来ない」と。

〔頌〕 頌曰。圓珠不穴。大璞不琢。道人所貴無稜角。

〔訓読〕 頌に曰く。円珠穴あらず、大璞は琢せず。道人の貴ぶ所稜角無し。道人の貴ぶ所稜角無し。肯路を拈却すれば根塵空なり。脱体し無依にして活卓卓。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいました。円い真珠には穴があ

〔釈意〕

瑞巖師彦は巖頭全歳の法を継いだ。この時は「仏法の真理」をどのように捉えればよいかかわからず、巖頭に尋ねている。巖頭は「動くこと」と答え、瑞巖は思案するのであったが、巖頭は「仏法の真理」というものを分別して知識としてわかったとしても、それは煩惱であり、また、会得しないままでは仏になることはできないという。分別するしないに関わらず、物事は変化していくのであるから、「不変の理」について考える必要はないとし、「動く時」について知りたがる瑞巖を「仏法の真実がわかっていない」と突き放したのである。「仏法の真理を会得した」ということは想いがあれば思慮分別であり、「未得」であるなら生死の迷いから脱することなく、凡夫のままであるという。

拈却肯路根塵空。脱體無依活卓卓。

〔釈意〕

ここでは本則における「本常の理」について述べている。真珠と

りません。良い宝玉は磨く必要がありません。仏道に入った者の貴ぶところは、尖った角がないことです。分別の道を脱すれば、主観と客観は空となります。ありのままに、何物にも執着することなければ、いきいきとして自在です。

良い宝玉は、自然そのまままで既に完成されているといい、本常の理とは根源的本質の顕現といっている。また、稜角は分別のことであり、それがないこと、分別にこだわらないこそが、仏道に入った者が貴び、目指すべきこととしていっている。分別を捨てるといふことは、主観と客観の区別を設けないことであり、ありのままに何物にも執着することがなければ、自由自在の境地に至るとしている。

【語彙】

【瑞巖】瑞巖師彦（不詳）のこと。唐末の人。武肅王錢氏の帰依を受けた。【巖頭】巖頭全藏（828～887）のこと。泉州（福建省）南安県の人。洞庭湖畔の鄂州（湖北省）巖頭において宗風を振う。【佇思】く停機と続く。分別思慮に陥って自由の活策略に欠けること。【根塵】主観と客観。【道人】仏道の中に入った人。【拈却】取り除ける、打ち捨てるということ。【脱體】悟道のありのままの丸出し。【活卓卓】活き活きとして高く聳えるさま。

第七十六則 首山三句

【本則】 擧。首山示衆云。第一句薦得與仏祖為師。第二句薦得與人天為師。第三句薦得自救不了。僧云。和尚是第幾句薦得。山云。月落三更穿市過。

【訓読】 挙す。首山衆に示して云く、第一句に薦得すれば祖の与に師と為る。第二句に薦得すれば人天の与に師と爲る。第三句に薦得すれば自救不了。僧云く、和尚は是れ第幾句に薦得するや。山云く、月落ちて三更市を穿つて過ぐ。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。首山省念が大眾に示して云いました。第一句に法のすべてを領得すれば、三世諸佛・歴代祖師の師となることが出来ます。第二句に法のすべてを集めて我ものにすることが出来れば、人間界・天上界の師となることが出来ます。また、三句に法のすべてを集めて領得すれば、他を救うことはおろか、自分を救うことさえ出来ません。僧が云いました。和尚は第何句で領得されましたか、と。首山省念は、月さえ出ていない真夜中を突き抜けて来た、と答えました。

【頌】

頌曰。佛祖髑髏穿一串。宮漏沈沈密傳箭。人天機要發千鈞。雲陣輝輝急飛電。箇中人看轉變。遇賤則貴貴則賤。得珠罔象兮至道綿綿。游刃亡牛兮赤心片片。

〔訓読〕

頌に曰く。仏祖の髑髏一串に穿つ。宮漏沈沈密に箭を傳う。人天の機要千鈞を発し、雲陣輝輝として急に電を飛ばす。箇中の人 転変を看よ。賤に遇うては則ち貴貴には則ち賤。珠を罔象に得て 至道綿綿たり。刃を亡牛に遊ばしめて赤心片片たり。

〔釈意〕

仏法を学ぶ者の心得は、第一に、この世の中に真実の道は一つしかないと言うことである。人法無我といい、脱分別ともいえる様態である。第二には、内実と外観、平等と差別とかいうように、自己の現成として仏であることを会得する立場である。第三には、すべてをありのままに捉えて、慈悲行との想いも無く済度を行じることである。第一は修行、第二は得悟、第三は垂手である。十牛図に示される人牛俱忘までが第一であり、返本還元が第二、入麈垂手が第三である。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいました。万物平等の第一義諦は、諸仏諸祖の髑髏を一串に刺し通すことです。宮殿の奥深くに備えつけてある水時計は、静かに水が流れて人形のもつ筋の針を音もなく動かして時を示します。悟境をいう第二は、人としての本質がすばらしい働きを現し、あたかも千鈞の弩を発するようです。それを喩えれば、鳥の如く集散し、電の如く稲妻を走らすように、物事に対応することです。第三の立場は、慈悲行の実践を指し、箇中の人とは転変自在の境地をいいます。首山は、第三の立場こそ、盲目の人が珠を得たようなもので、既成概念が無いことで、大道を自由に往来するようになると思います。大げさに厚刃の包丁を使わないでも、節々の間へ包丁が自由に入って、あたかも遊んでいるように使いこなせます。

〔釈意〕

諸佛諸祖の髑髏を一串するのは、仏法の真諦を指す。諸行無常・諸法無我である。第二句は人天の機要と表して、悟達の境地を示した。雲がたなびき、鳥が群れ飛び、電が轟く諸方実相をいう。首山の「月落ちて三更、市を穿つて過ぐ」とは、夜中の暗闇（平等）を通り抜け出たところに、ありのままの現実を認めることである。

〔語彙〕

【薦得】 進んで受け止める。全部とりあげること。転じて、すっかり会得すること。領得。【自救不了】 自分さえ救えない。【三更】 現在の午前零時から午前二時の間。真夜中。【首山】 首山省念（926～993） 莒州（山東省）の人。風穴延沼の法嗣。汝州首山の広教院に住して臨済の玄風を挙揚した。門下に汾陽善昭がいる。【法身】 仏の自性である真如そのもの。【般若】 真実の

智慧で煩惱を除く働き。【報身】仏の三身の一。因位における無量の願行の報果として得られた、万徳圓滿の仏身を指す。【応身】仏が衆生を化道するのに最も適するように、その機根や環境に応じた形で現れた仏身を云う。【雲門の三句】『碧巖録』第二十七則函蓋乾坤（天地をおおう）截断衆流（意識の流れを断つ）随波逐浪（あるがままに従う）【箭】やだけ、しのだけ、やがら、矢、水どけいのめもりをきざんだ矢。【得珠罔象】『莊子』天地第十二第四章黄帝使象罔一象罔得之「首目の人が珠を得たようなものである。かたちなきもの。心に思い描くことがないこと。つまり無心を云う。【游刃亡牛】『莊子』養生主第三章「養生」自然から与えられた生命を本来のままに生きつくすことを意味する。【赤心片片】真心。外に何物もない。【千鈞】千鈞の弩、矢または石を発射する武器、大きな弓。

第七十七則 仰山随分

【本則】舉。僧問仰山。和尚還識字否。山云。随分。僧乃右旋一匝云。是甚麼字。山於地上書箇十字。僧左旋一匝云。是甚麼字。山改十字作卍字。僧畫一圓相以两手托如修羅掌日月勢云。是甚麼字。山乃畫圓相圍却卍字。僧乃作樓至勢。山云。如是如是汝善護持。

【訓読】 挙す。僧 仰山に問う、和尚還つて字を知るや否や。山云く、分に随う。僧乃ち右旋一匝し云く、是れ甚麼の字ぞ。山 地上に箇の十の字を書す。僧 左旋一匝して云く、是れ甚麼の字ぞ。山 十の字を改めて卍の字となす。僧 一円相を画いて両手を以つて托げ 修羅の日月を掌にする勢の如くにて云く、是れ甚麼の字ぞ。山乃ち円相を画いて卍の字を圍却す。僧乃ち樓至の勢をなす。山云く、如是如是汝善く護持せよ。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。ある僧が仰山に質問をしました。「和尚は文字と云うもの、禪の境地を理解していますか？」と。仰山は「衲は分相應に知っている」といいました。僧は、右廻りして、「これは何という文字ですか」とたずねました。仰山はただちに地上に十の字を書いて見せました。次に僧は左にぐるりと身を転じて云いました。「これは何と云う文字ですか」と。仰山は、先の十の字を改めて卍の字としました。するとこの僧は、空中に○を画いて、両手でそれをさし上げ、阿修羅が日月を掌中に入れたような動作をして「これは何の字ですか」と云いました。仰山は円相を画いて卍字を囲んで㊦の形を作りました。僧は今度それを見て仁王が千仏の最後に成仏が決まったとき、籌を引いて大泣きした後、大笑して護法神となった様子をしました。仰山は「そのとおり、そのとおり。守りとおしなさい」と云いました。

〔釈意〕

文字の根本を究めていないと、文字の真義は理解出来ないといっている。仰山が地面に例えば「十」の字を書いた。十は十分の意で完全な会得を意味する。次に、左に一回転を十字から卍とした。順卍字は右まわりで、仏道の現成を表している。真の卍字が手に入ってこそ、自由自在のはたらきができるようになる。次の卍は現実肯定である。悟境から現実への回帰があつて仏道の真実を了得したことになる。阿修羅の大忿怒するところを示したのは、慈悲行の実践を表して、仏道の円満成就となした。

【頌】 頌云。道環之虚靡盈。空印之字未形。妙運天輪地軸。密羅武緯文経。放開控聚。獨立周行。機發玄樞兮青光激電。眼合紫光兮白日見星。

【訓読】 頌に云く。道環の虚盈る靡く、空印の字未だ形れず。妙に天輪地軸を運し、密に武緯文経を羅らぬ。放開控聚、獨立周行。機玄樞を發して青天に電を激す。眼に紫光を含んで白日に星を見る。

【和訳】

天童寛和尚が頌にいました。「道環」の中は空虚です。「空印の字」は空中に印を押すようなものです。僧の左旋は天輪で右旋は地軸です。仰山の十字は、武緯の縦と、文経の横とを密にならべて書いて見事です。仰山の文武を兼ね備えた才覚は、放開にして把住です。その働きは独立絶対の境界に達しています。自在の接化はそこから出てくる電光石火のすばやい作用です。その眼は紫光をふくんで、日中に星を見るほどの眼力があります。仰山の前へ出て来た僧は、仰山の手腕にからめとえられました。

【釈意】

「道環の虚」「空印の字」は、ともに仏道をあらわしている。一方は環にたとえ、一方は印にたとえている。内も外も、どこもかしこも、の意である。僧の左旋の天輪は仏法、右旋の軸では世法である。仰山の妙用は、修行者にたいして把住と放行を繰り出す自在の境地にある。仰山は、白日の星を見るほどの眼力でこの僧の心境まで洞察しているのである。

【語彙】

【仰山慧寂】(807～883、あるいは814～890) 瀧山靈祐の法嗣【随分】身分相応のこと。【樓至】仁王。【道環】環は円い輪になって端のないもの。道は佛祖の大道。仏祖の大道は始中終にかかわらず連環して「無始無終」で初発心から佛身まで間断がないこ

と。【空印文字】空中に書くこと。真理の作用をたとえていう。心理の形はその姿を現わしてはいないがその作用は妙である。心理の作用はあたかも空中に書いた文字のように形を現わさないが天地万物を動かしているものであることをいう。【天輪地軸】天動説から出た語で天の廻る軌道を輪といい、地の動かないその中心を軸という。【文緯文経】「緯は地の東西をい、南北を経と云う」。【放開捏聚】開放して自由にする、捏聚は締結のことで、しめくくりて把住する意、師家が学人に対して把住かと思えば手放す自在の境地をいう。やりたいようにやらせる、手綱をゆるめる、「放行」ともいう。【玄枢】幽玄な枢機、肝心かなめ、肝要。転じて自然の移り変わりの微妙なはたらきをつかさどるもの。【独立周行】独立不改と同じ。他の何物にも依存しない「道」の絶対性をいう。「周行」は循環運動と解する説が有力である。

第七十八則 雲門餠餅

【本則】 擧。僧問雲門。如何是超佛越祖之談。門云。餠餅。

【訓読】 挙す。僧雲門に問う、如何なるか是れ超仏越祖の談。門云く、餠餅。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。僧が雲門文偃に問いました。仏を超え、祖を超える事を、言葉でどの様に説明できますか。雲門は答えました。餠餅、と。

【釈意】

僧は、雲門に対して、仏や祖を超越する事を言葉ではどの様に説明できるかと質問した。雲門の答えは「餠餅」の一言であった。餠餅とは、胡麻で作った餅の事で、我々の身近にある物であり、特別なことばではなく、特別なものでもない。雲門は、仏法や仏祖を特別な存在と捉えるそのような質問に意味はなく、言葉で説明できないことであり、また、たとえ答えたとしても、答えるこ

と自体が間違いであると指摘した。一方、質問した僧も、その事を知っていたが雲門を試すために、この様な質問をしている。雲門は、日常そのもので、特別な存在では無いのが仏法であること
を指して、「餠餅」と答えたのである。

【頌】 頌曰。餠餅云超佛祖談。句中無味若爲參。衲僧一日知飽。方見雲門面不慙。

【訓詁】 頌に曰く。餠餅を超仏越祖の談という。句中に味無し若為が参ぜん。衲僧一日如し飽くことを知らば、方に見ん雲門の面慙じざることを。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいいました。雲門は、餠餅こそ仏を超え、祖を超える言葉と説明しました。この餠餅には、特別な味などは無く、日常に誰もが食べるものです。その様なものから、超仏越祖の事を学ぶ事はできません。しかし、修行僧が悟りの境地にいたれば、雲門の言っていることが分って、堂々と言いつつ意図が会得できるであろう。

【釈意】

餠餅を「句中に味無し」と言つて、悟りは日常そのものであり、特殊な存在では無いことを示した。超仏越祖を、言葉で説明する事は無意味であり、そもそも言葉での説明が出来ないのである。それでも雲門はあえて、餠餅といつて僧を接化している。もし、この僧が真摯に仏道と向き合っているなら、雲門の答えた無味の意味するところを理解できたであろう。

【語彙】 【雲門】 雲門文偃（864～949）雲門宗の開祖。雪峯義存の法師。【餠餅】 小麦粉を練つて発酵させ、胡麻をまぶして焼き上げた食

品。日本のいわゆる餅とは異なる、とある。【超仏越祖】仏や祖を超越する事。仏や祖の臭味を脱した境地。【句中に味無し】洞山守初（910〜990）の指通機頌に「洞山寥策 一無可有 無味之談 寒斷人口」というものがある。雲門の餠餅の言葉にちなみ、句中無味といったものだが、実は何とも言いようの無い味の反語。【若為が参ぜん】「若為」は「如何」と同じ。参は参得、参究の事で、究めつくす事。【飽く】餠餅が無味を飽くほど味わう意味で、仏法を知り尽くした事。【面慙ざる事を】自分の心に済まないという気持ちがあれば、人に対し、慙愧して赤面することはないという意味。

第七十九則 長沙進歩

【本則】 擧。長沙令僧問會和尚。未見南泉時如何。會良久。僧云。見後如何。會云。不可別有也。僧回擧似長沙。沙云。百尺竿頭坐底人。雖然得入未爲眞。百尺竿頭須進歩。十方世界是全身。僧云。百尺竿頭如何進歩。沙云。朗州山澧州水。僧云不會。沙云。四海五湖王化裡。

【訓読】 擧す。長沙 僧をして会和尚に問はしむ。未だ南泉に見みえざる時如何。会良久す。僧云く、見みえて後如何。会云く、別に有るべからず。僧廻つて沙に擧す。沙云く、百尺竿頭に坐する底の人、然も得入すと雖も未だ眞と為さず。百尺竿頭に須らく歩を進むべし。十方世界是れ全身。僧云く、百尺竿頭如何が歩を進めん。沙云く、郎州の山澧州の水。僧云く、不會。沙云く、四海五湖王化の裡。

【和訳】

諸君、よく聞きなさい。長沙景岑がある僧を使つて、会和尚に質問をさせました。南泉普願に会う前

【釈意】

長沙景岑は南泉普願の法嗣であり、会和尚は長沙の兄弟弟子である。その会和尚との会話により、使いにやった僧を悟りへ導く話

はどうでしたか。会和尚は黙っていました。僧は言いました。(南泉に) 出会ったあとはどうですか。会和尚は言いました。別にどうということもない、と。僧は帰って長沙に報告しました。長沙は言いました。(会和尚は) 百尺の竿頭まで行きましたね。行き着いたのですが、しかしまだ本物にはなっていません。百尺の竿頭から更に先へ進めば、十方世界が(自身の) 全身になるのです。僧は言いました。百尺の竿頭からどのように進むのですか。長沙は言いました。郎州の山、澧州の水。僧は言いました。わかりません。長沙は言いました。四海五湖(国中) は王の徳及ぶ所です。

【頌】 頌曰。玉人夢破一聲雞。轉盼生涯色色齊。有信風雷催出蟄。無言桃李自成蹊。及時節力耕犁。誰怕春疇沒脛泥。

〔訓読〕 頌に曰く。玉人夢破る一声の鶏。転盼すれば生涯色色齊し。有信の風雷出蟄を催し、無言の桃李自ずから蹊を成す。時節に及んで耕犁を力む。誰か怕れん春疇、脛を没する泥。

である。長沙は会和尚に使いの僧をやるのであるが、会和尚は仏法に出会う前は無言で応じ、出会った後は変わらないと答えた。つまり全ての物事はありのままであり、日常と変わりはないということである。長沙はそれを聞き百尺竿頭に至ったといった。悟達のことである。しかし、悟りに至ってはいるが、そこに安住しており自己満足しているだけだ、と続けた。それは完全な悟りではない、長沙はそこから更に進めば仏道成就になるといった。長沙は僧にその方法を尋ねられ、郎州の山、澧州の水というが、僧は理解できない。山は山、水は水のままということである。さらに長沙は四海五湖王化の裡という。それは仏の教えはこの世界全てにいきわたっており全てのもものが仏法であるということを示しているのである。

〔和訳〕

天童覚和尚が頌にいました。玉人を夢から覚めさせる鶏の一声。振り返って周りをみれば、あらゆる存在がそれぞれに等しく存在しているのです。春の訪れを告げる風と雷は、地中に籠っている虫を地上に導きます。ことばをいうことのない桃や李の元にも自然に道が出来ます。時期になれば農作業に励みます。誰が恐れるでしょうか、春の田の畝に脛まで浸かって泥だらけになることを。

〔釈意〕

玉人とは使いの僧のことであり、分別に執られていたが、長沙の指導によりそこから離れることができて、その眼で見渡してみると、全ての物事をありのままに見えるようになったという。春は毎年必ずやって来て風が吹き、春雷が鳴りそれによって虫は土の中から出てくる。風雷は長沙で虫が僧である。桃李は悟りで、春には花が咲きそこには自然に道が開かれる。農作業は修行に励むことをいい、田に入って泥だらけになることを嫌がる農夫などいないといっている。これは僧のことで、修行を進めることである。

〔語彙〕

【長沙】（？）⁸⁶⁸ 南泉普願の法嗣、招賢大師、長沙和尚、後に岑大虫ともいわれた。【会和尚】生没不詳、南泉普願の弟子と考えられる。【南泉】南泉普願（748～835）馬祖道一の法嗣。【良久】しばしの間無言の意【得人】悟人と同じ悟りの境地に入ったこと。【四海五湖】海内・天下のこと。【玉人】玉をつくる職人。つまり悟りを目指す僧。【有信風雷催出蟄】『礼記』の月令編にある。風雷が春信を伝えることから【無言桃李自成蹊】桃や李は何も言わないが、美しい花や実がなるため、人々が集まり自然に道ができるということ。『史記』（李廣伝）等にてくる「桃李無言、下自成蹊」。

第八十則 龍牙過板

【本則】 擧。龍牙問翠微。如何是祖師西來意。微云。與我過禪版來。牙取禪版與翠微。微接得便打。牙云。打即任

打。要且無祖師意。又問臨際。如何是祖師西來意。際云。與我過蒲團來。牙取蒲團與臨際。際接得便打。牙云。打即任打。要且無祖師意。牙後住院。有僧問。和尚當年問翠微臨際祖師意。二尊宿明也未。牙云。明即明矣。要且無祖師意。

〔訓誥〕

挙す。竜牙 翠微に問う、如何なるか是れ祖師西來意。微云く、我がために禪版を過し來れ。牙 禪版を取りて翠微にあたう。微 接得して便ち打つ。牙云く、打つことは即ち打つに任す。なおかつ祖師意無し。又臨際に問う、如何なるか是れ祖師西來意。際云く、我がために蒲團を過ち來れ。牙 蒲團を取りて臨際にあたう。際 接得して便ち打つ。牙云く、打つことは即ち打つに任す。なおかつ祖師意無し。牙後に院に住す。僧有りて問う、和尚當年翠微と臨際に祖師意を問う。二尊宿明かすや也た未しや。牙云く、明かすことは即ち明かす。なおかつ祖師意無し。

〔和訳〕

諸君、よく聞きなさい。あるとき竜牙居遁が、翠微無学に「祖師西來意とはどのようなことですか」と問いました。翠微は「衲に禪板を持って来てくれませんか」と答えました。竜牙は禪板を持って来て、翠微に渡しました。すると翠微は禪板を受け取ると、その禪板で竜牙を打ちました。竜牙は「お打ちになられてもそこに祖師西來意はありません」と答えました。また、あるとき竜牙は、臨済にも同様に

〔釈意〕

祖師西來意は、眞の自己でも仏心でも仏法の奥義といつてもよい。蒲團と禪版は、仏法が日常に在ることを示している。特別な存在としての仏を想定する見解の誤りを直截に示している。誤りを正す意図が打つ行為に現れているが、竜牙は充分にそのことを理解しているので、「そこに西來意はない」と応じたのである。眞實はこの世界に遍満していて、特別に仏の世界が別所に存在するのではないことをいう。最後の、僧への返答も同じである。

「祖師西來意とはどのようなことですか」と問いました。臨濟は「衲のために坐蒲をもってきてくれませんか」といいました。竜牙は坐蒲を持って来て、臨濟に渡しました。すると臨濟は坐蒲を受け取ると、その坐蒲で竜牙を打ちました。竜牙は「お打ちになられても、そこに祖師西來意はありません」と答えました。竜牙が後に住持となった時、修行僧が質問しました。「和尚様、その当時、翠微禪師と臨濟禪師に、祖師西來意を質問されましたが、お二人の祖師は明確なお答えをされましたか」と。竜牙は、「明らかにされたことはされたのだが、そこに西來意は無かった」と答えました。

【頌】 頌曰。蒲團禪版對龍牙。何事當機不作家。未意成褫明目下。恐將流落在天涯。虛空那掛劍。星漢卻浮槎。不萌草解藏香象。無底籃能著活蛇。今日江湖何障礙。通方津渡有缸車。

【訓読】 頌に曰く。蒲団 禪版 竜牙に對す。何事ぞ機に當りて作家とならざる。未だ成褫して目下に明なることを意はず。將に流落して天涯に在らんとすることを恐る。虚空 那んぞ劍を掛けん。星漢卻つて槎を浮かぶ。不萌の草に香象を蔵すことを解し、無底の籃に能く活蛇を著く。今日の江湖 何ぞ障礙あらん。通方の津渡に缸車有り。

【和訳】

天童覚和尚が頌にいたしました。翠微と臨済が蒲団と禅版で竜牙に応じました。なぜ竜牙は、ただ打たれるに任せて、打ち返す力量を見せなかつたのでしよう。相手を圧倒して、自分の鋭さを明らかにすることを避けてしまいました。それは、落ちぶれて故郷を後にすることを怖れたからに他ならないのです。虚空に剣を掛けることは出来ないように、また、天の川に向かつて舟を漕ぎ出したように、分別を離れていたからです。その力量は、不萌の草に香象を隠したり、浅い箱に毒蛇を入れたりできるくらい格別に優れています。今日の修行僧も、竜牙の会得したところが了悟出来れば、この世界で何をなすにも、何処へ行くにも自由自在です。

【語彙】

【竜牙居遁】(835〜923)、撫州(江西省)南城の人。竜牙山妙済禅苑に住す。証空大師と号される。【翠微無学】翠微(不詳)、丹霞天然の法嗣。北京(映西省)終南山翠微寺に住す。僖宗の請により入内説法す。広照大師と号される。【祖師西来意】達磨大師が西天から伝来されたところの宗意。仏法の深奥、禅の宗意。第四七則趙州柏樹に出ている。【禅版】禅板。坐禅の時に身をよせかける為の道具。【接得】学人に接して道を得せしめること。【将錯就錯】誤ったことを誤りなりにまとめる。すでに間違ってしまった事柄をその状況に応じて上手に処理し、問題を有利に解決する策略をいう。【軟頤】軟弱、頑愚。【尊宿】

宏智禅師頌古百則の研究(三)(佐藤)

【釈意】

竜牙は翠微と臨済の対応に、二度も悟達の境地を表すことを避けた。作家の動きを見せる機会を逃したのは何故か。竜牙には自分の才能を顕示しようなどという考えは微塵もなく、大機用をあくまで隠している。悟了の人にとって、渡場には船もあれば、駅には車馬もある。四方八方自由自在である。自由自在に接化するのが龍牙の姿で、そこには更なる仏心も悟境も西来意も要しないのである。

宏智禪師頌古百則の研究（三）（佐藤）

智徳優れた高僧。【作家ならざる】力量、機用を備えた伶俐の人。ここでは伶俐ではない人。【流落】流離落胆で、落ちぶれること。【天涯】故郷から遠く離れた空のこと、落ちぶれて旅の空に有るということ。【虚空那ぞ剣を掛けん】同安常察の語に「虚空針を掛けず、玉兔鱗を被らず」とある。虚空に針一本掛けられないのに、ましてや剣など掛かりようがない。遍界無一物を言う。【不萌の草に香象を蔵す】草の芽が地上へ生え出る事を指す。不萌草とあれば「萌えない草」と言う事。『五灯会元』十三には「僧曹山に問う、不萌草甚座としてか能く香象蔵す」とある。【無底の藍に能く活蛇を著く】格外的機用を形容したもの。【通方の津渡に航車あり】通方は四方八方、至る所と言う意味。津渡は渡し場を指すが、車とあるから、車に降り降りする駅の意味も含んでいる。渡し場には船があり、駅には車があり、交通は四方八方自由自在であるという意味。